紀伊國名所圖会

後編　五之巻

日高郡

ル 4
325
22

ル 6
325
ス

紀伊名所圖會後編巻之五

目録

日高郡
原谷驛 附高 附高
古城址
東光寺
萩原 附園
大東宮
鳳生寺
九品寺
湯川嗜傳
王子權現
富山政氏故居
古郷名
御所谷
内畑王子
高家王子
八幡宮
西圓寺
古墳
高家荘
縫掛王子
内原郷
法華寺
淨專寺
富安荘
道成寺道
湯川氏故居
志賀荘
德本行者圓
方杭
小竹
馬宮王子
内原直
安樂寺
若宮
富安王子
小松原驛 附園
亀山古城墳 附園
若一王子
二尊社
小浦湊 附園

御霊宮
若一王子
中ゑ磯
光徳寺
御清洞
風早
小池元
和田打原
入山古城址
王子社
薗荘
御坊
千津川
常楽寺
北井城漬
産湯井
絆突
かじみ石
龍王社
御埼社
王子社
女郎墓
清光院
新宮文書
矢田荘
笠置山王子
甲山
大将軍社
搭樹
御茶之石
美保浦
海士取鴉
和田浦
若一王子
財部荘
吉日社
薗八幡宮
拝殿
八幡宮
北井湊
桑原殿松
白髭明神
日御崎
三保崎
雷明神社
二尾山
財部郷
吉祥寺焼
寺市
正平章
くそ王子

漬巻
古漬沼
別ノ宮
江川谷
丹生社
子丸城址
山神生地
玲川
洞瀧
朝日社
芳澤あやめ園
下愛徳社
大瀧
道成寺
桜大樹
八幡宮
正八幡宮
山王社
玉垂氏坂居
玄子川
紀津社
観音寺
鳴瀧
長子八幡宮
建保縁起
寒川
鬼瓦園
安珠塚
寶医印塔
真妻社
生蓮寺
城ケ段
早苗社
雄山
船津
矢筈嶽
姉子社
寒川荘
手早瀧
縁起
清姫塚
川上荘
真妻山
大峰山
大山神社
信業寺
喬麦
黒鳴瀧
鶴川瀧
神場温泉
上愛徳社
丹生神社

鶴が城　囲堺
龍神泥泉　雑色龍王社
川島　檜龍造圖
湯野　敷垣内
笠茶屋　小森

亀田潰
泥泉寺
野垣内
龍神泥泉寺故居
復唐壇

洋夷嶽
水乞鳥
佐久間橋
業研坂
城森

日高郡　當郡主田郡の南ニ位して南ハ紀業郡と界ス　東ハ大和國吉野郡十津川郷と隣し西ハ海ニ臨ミ　東西ハ海ニ臨ミ　東ハ

阪高　續日本紀大寶二年ノ條ニ阪高と書キ　阪ハ比州俗名ニ用ヒ　高ハ日高と書キ　高ハ日高と書キ

氷高郡　日高ニ天平寶字八年ノ條ニ氷高と書キ　氷ハ比の州俗名ニて日高と書キ　氷高と書キ

古郷名　和名抄ニ載ル當郡ノ郷名内原絁紬結氷石鹿　全戸南北ニ長クして云ヘリ　郷ニ下れ條ニ載ル

高家莊　主田郡と家瀬山を境と次ニ簑村を境ス

○**小作**　家瀬山の麓ニ家居ス

○**原谷驛**　在田郡河瀬村より一里半　長サ八十丁餘の間ニ村名數立セリ　此ハ里人の俗ニ呼ハ八十町の驛ト　あつと谷中

○**御所谷**　家谷村の艮北二之町　家瀬山の西十ニ丁ニ町ニ　御幸記　ハ谷ニ羽院熊野御幸の行宮

十日　過シ　シノセ　推原樹陰滋路甚狹　於此邊有盈養御所

云又私詞儲之整休息山中小食於此所上下伐木技隨

分造槌付榊枝持參内ノ八夕ノ王子　童子云云　分爵云云　各結付之云云

○**縫掛王子社**　家瀬山の麓ニ　御幸記ニ家瀬山を　紀て參詣カケ王子と　ハ社なり

駿谷原

○馬留王子社　東谷村の小名中村ホリウヒ

○古城址　東谷村内中紀下紀二ケ所ホリウヒ一ヒ侍山
元禄宇家正一ヒ田造録の居城と

○内畑王子社　萩原村の小名内の畑ヨリウヒ熟ヒ熟ヒ紀古乃ホリウヒしと牧世
今村北ホうつ次神幸記ホ内ノハタノ王子と見えたりと
樋王子と

内原郷　和名抄板車内原と行る厚ヒ原の転り氏郷今廃せりとへども
東谷村の里外社及鎮掛社菱屋の棟札年紀政所内原在家村と
人あり又内ノハタとへ北名ヒ東谷も既内原谷れ書けれべし又村中ホ
内原れ後裔とへひ郷へる原ヒ原ヒこ原ホよる ホこれ四の郷名けれ
知れ

内原直年羅　氏北の人けれべし内原直一幸音狭山命之後也と行る
續日本紀　天平寶字八年丁未先是從二位文室真人淨三等奏曰伏
奉去年十二月十日紀寺奴益人等訴云紀表祁臣之女粳
賣嫁本國氷高評人内原直年羅生兒身賣狛賣二人蒙急
則臣處分居住寺家造工等食後至庚寅編戸之歳三綱按
數名爲奴婢因斯久時告愁分雪無由空歴多年干今屈滞

幸屬天朝照臨寓内披陳欝結伏望正名者中略於是益麻
呂等十二人賜姓紀朝臣真玉女等五十九人内原直即
以益麻呂為戸頭編附京戸云云
天平六年出雲國計會帳云
天平五年九月六日畧同日符壹通熊谷團兵士紀ホ原直忍熊意宇團兵士
蝮部臣稲主歩射馬槍試練定却還狀九月十三日到國云云拙ヒるホホ東也し内東直ホ
日しく氏北ヒて出
くれ姓けりべし

○東光寺　萩原村の小名ホして東谷ヒ
しホ多へ慶して寺ホのくれくもて
○高家王子社　小名東光ちホヒ行ヒて高東村ホ掘せて乱ホ古ヒて高東
源平盛衰記云　擔亮維盛ヒ菩坂をうち下て森ケ瀬山を城るとて云
乱れ王子を伏拝み日牧明行る行ホ不墨れ浪ヒ近付り
○法華寺　ヒる社れ物ホ行ヒて天名宗ヒり
○安樂寺　日所ホ行ヒて浄土宗西山派ヒり
○萩原　内の畑れ自ホ行ヒて谷村の名とけれを八王所抄蔵
北東ヒ芋ホ萩原を本國の名所とまる氏北けりべし

新千載集
萩原や
雲の月
秋の月哉
按ふに御幸記切目
王子御舎の條に
聖徳月照の頌あ
るに依て此歌を思
ふに此歌なるべし

萩原

御幸記云

次出此木原又過野萩薄遥靡眺望甚幽 此文によれば此あたり萩多くありしより村の名となれるなるべし

此邊高家云々 聖護院宮弁民部卿領云々

此所共有便事但未尋得

枕草紙 原ははぎはら 春曙抄に八雲御抄を引て本国の名としるされたるは此辺なるべし

新續古今集

萩原や霜枯秋風吹からに袂をぬらす涙の月　　如願法師

○八幡宮 同村にあり

○浄専寺 同村にあり浄土真宗西派なり

若宮神社 前木村の西端にあり一村の産土神なり古人の猪にむかひし当村に猪の内といふ二人のものありて聖護院宮熊野詣の時当家の門前を御通り其時山伏と口論になりし山伏を害せしにその怨霊あれば当村に山伏の霊を祀るといふまた霊を祀り宮を築く

大森宮 同所中村にあり同村の氏神なり祀るといふ

西念寺 同村西窪にあり浄土宗西山派にて昔円光大師の門弟念仏上人此世俗を止め上人の名号といふ一巻あり又是を寺宝として上人此時杖木を納めし功により今にありといふ

富安莊 とみやすのしやう 富安の本にいたりて田ヶ村を総ぶ

○富安王子社 下富安村にあり荘中四ヶ村の産土神なり若一王子と云ふ又天正年中没収となりしかば社殿を寄せしに天正の頃まで社地ありし田畑となる

御幸記云 次又参王子 田藤次云々

風生寺 同村の内北にあり西の宮にいたりて禅宗にて熊野の風生寺と云ふ湯川氏の七世天養居士の建立にて禅僧笑外和尚の開基といふ湯川氏の時代は近郷の村々にわたりて佛殿のうへ湯川直光の木像を安ぜり又其子の文書をも宝蔵せり永宅老とあり

古墳 ふるつか 上富安村の西山にあり松林の中にあり大石にて築きたり入口より一間ほど穴にて墓のうちに人一人を寄すべし

○道成寺道 富安王子社の前熊野街道より右へわかるる是なり道成寺へは此所より近く八丁なり傍に石を立て是を表せり是より寺まで凡近八丁なり

◎小松原驛 宿所にて二里家居多く軒をつらねたり

御宿

御幸記云

十日暑 次寄小松原御宿御所邊四宿之處已無之國沙汰人成敗歟之假屋芝少之間無縁者不入其負占小宅立簡之憂内府家人押入宿了不可出之由忿怒云云國

小高松原の宿
清蔵
孫井

自然百餐句集
こうげきぐ
ちゃわ
本ちうれ
小玉屋
宋紙
ハマン

沙汰之人又非我進止之由後干云云只依人涯分偏頗
歟不追相論又非可入身此御所有水練便宜臨深淵搆
御所即打過遥尋宿所

○淨土山安養院九品寺 同村ホトリ淨土宗なり

當寺創起ハ未詳 慶長年中源家康公紀州ヲ攻給ヒシ時家康公當寺ヲ創ス

よつて大ハ慶長年中源家康公紀州攻給ヒシ時家康公當寺ヲ創ス

中源家康公紀州攻給ヒシ時家康公當寺ヲ創ス

ア帰依ある者多く遂ハ當寺を中興して淨土宗ハ寺也

ものとなる寺又十四箇寺弘中ホトリ

常楽記云 康暦二年三月十八日了賢房妻室於紀州小松原宿他界

熊野下向於九品寺茶毘

○法林寺 同村ホトリ淨土宗 法号存蓮 結西流 湯川直光ハ此寺ニテ三男

湯川氏坂居 同村の乾ノ方ニ圍ハ中ホトリ 近世氏地ヲ取て鬼瓦并ホ振
并ハ此ヲ協出せり鬼瓦ハ今村中法林ホトリ

○亀山古城址 宮道より西北方ホ物起して丸山村の中央ホトリる山ヲ亀山と
坂道を登る津三四丁許ホて山上平坦四町山巡一時ハ間ヲ要ス
きを以て三三月比を迎ヒのもれ
湯川氏墨傳 湯川氏ハ故春直光直春三世より次おれ名称ヲ改湯川実紀及ハ系図
紀とつくる書ヒしれども近世ハ書と又ハて伝用しがたき事多しれ
ど又他の地もべき事ヲ引用れ
また皆くも書を引用れ

湯川氏と其先甲斐源氏武田系より出つ元祖を忠三郎

伝忠とつ 実紀くて三郎と云ふ湯川紀といふ武田系ホ伝忠忠三郎父祖尚下紀州
ヒて三人を生む二郎伝春三郎伝忠と次三郎を
来住ホ入り 帝都を去湯ヒ
しかハ二男ヒホ代るべきホ三郎ハ女を
ホむ甚切ヒるを以て 次三郎ハ女を
次郎ハ武田氏ヒ去ホ尚れるホ始ヒホ
やしなく書るもれるもべ実伝ホて
政弘ホ小次郎といふ氏代後云ホ
て二人を生む二郎伝春三郎伝忠
土ヒるを以て伝春を安芸ホ
ゆえホ甲州太郎 甲州次郎 若州三郎
川の流ホ一て先祖 先祖れ紀伊と安芸
ホ祖を忠三郎伝忠と云子を小次郎

湯川氏古城跡の圖

日しをれも見かは又也孫たるべう又後考昧紀不苗亭大納言の家と安藝入道伝
業の女とも〻紀村々武田系図は方実伝不て本国湯川氏ホ云あれども信業とハ別人
なりけんう永徳年中ホ湯川安義入道宗業といふ人あれども信業とハ別人
なるう又紀州武田系図とハ別人なり又紀州武田系図とハ別人
実なりア然るに是ハ二郎伝忠号れ名々〻を伝大〻
別氏と伝ホ載ル 弘安七須ヤわ〻ん罪ありて熊野湯川
ホ遠流せら原湯川々ゆる道湯川村とハ 其須熊野ホ党賊ありて山中
戦横行し富を奪ひ事を恣にしいへども能行家なるあ
げるを以て官兵も捕ふる能ハ三郎
相分を代の志力を振て岩神作ホて逆ホ
其賊を斬ふと其切ホよりて 勅勘を免され 剃髪
妻都を賜ひぬ見よりて芳崇の内梅といふ所ホ居住次
芳崇ハ〻年妻弟小辺乃忠 二郎ハ子某 武田系図ホ作忠れ子を左郎伝業と書ちり 其子を強き
郎といふ 武田系図ホ忠を孫云伝有し事せて 勇力人ホ優と南北乱れ時
然聖八左司ハ其一人あり軍功ハ賞ホよりて左四日ゆる
二郎をも浮せ須ヤ中国ハ旅氏とありて氏山ホ旅と

いふ孫左郎よりと又出系 其外とつて祥傳を清じて
風光寺を建川 安業村ホ湯川中勢ホ捕とい 永正十九年ホ死を 家四元年造内裏修繕引付
其子改去宮内女捕ホ住ホ連歌ア
長ヤて宗祇を師友とし居地ハ像ホ嘉辰堂を建て
連歌ハ会せ戦おせりとつて 今田地ハ家ホ拘れて成を嘉辰堂を歌仙営ハ後ハ
十六年ホ年次改去ハ子を亜光といふ民部少輔ホ住ホ
永徳年中畠山高政ア前軍を帥あて之好実体と戦ひ
河内国教長ハ津ホ敗死を亜光の子を亜夷といふ
亜光武田伝教ア弟を出ひて
一亜夷と名付とつて
豊臣太閤中国征伐の時熊谷清兼を亜夷といふを捕
ふを拒み其女婿玉置氏を味方ホ招ん と次玉置氏城
を次直春怒て其兵二百條人を以て和伐ハ城 玉置氏城 と圍て
是を攻む玉置氏敗て湯浅ハ白樫氏石垣ハ神保氏と九

ふるれ急ぎ兵を率ひて国に帰り苦ぐ逆賊又兵を率ひて各拠
氏を誅つを図り仙石権兵衛尉長久右衛門を結ひ兵を
海港に進む逆賊諸将を招き来て集めて戦を議決
流涕浮議して決せざる間に京軍海港を掩ひて至る
苦逆賊の術を失ひ居城に火を掛け捷死れ状と
なし芳賀治部の城に走る浅野の城に走り入しが招田
云郎右衛門が名を聞き死を恐れ遂に流ひ死を山中に
快くもくべしとて近習云郎が城を保ち仙石氏の軍減迫
寡に逆めんと欲逆賊士卒を率て境見峠に出て見減
苦ぐ山谷に分く谷深しとへども山路に親しく原去たなれば
れ中に羽に歌れ歌れどく走て奮戦せしかども京軍死傷乃
も兵等をあらぬ逆に四辺れ城に引退き兵をかちて一
城を圍む城を山中に拾遺を出て下川に移る京軍見

を追ふ山中氏滅治部川を渡り視搖を節ち湯川の軍
兵と大に力を合せて見を苦ぐ南津に一自線
に京軍山谷時蟻して達退自由るべ下若し逆に和
睦ちて旋る翌年大間れ命に依て中頃を安堵して族
三百人を率る和別弟山の城に系親次山中を拾見に
ひ参長に渇せんとすれども報月絶さ次第七月十六日
逆賊を旅舎に毒殺して拾を浴室に殺さて其臣等
悲て殉死さるもれ多し湊右京逆を為て栗山
三郎と共に孫兵を集めて海れ城を攻て南より逆
死れ板若氏を斬て先君を魂めんとて城を襲へ
とへども克ぎ克ぎ戦死さて此に於て湯川氏滅亡せ
る惜むべし然ども其族流中に及び各国に居りて
或る士となり或る農となりて今に名を傳へり

とゝ甚麼なるゝ時麼下の士ハ与ふる所ハ威恢乃類
又ゝ祢仏ハ礼寄附状多く出ハ多くハ出ハ多くて於ハ條
威を欲ハ恐ハ出ハ多くハ今其中ハ花押を摹てあく
ハ出次

湯川庄司 太平記建元元年 湯川実紀ハよれを保ハ郎とつひ一人あるべけれども年紀ハ名を記さ
ずれを考へべし

國大番云 正平七年五月十一日及晩彼是云八幡官軍堅敗北歟
畧 熊野湯河庄司此間顕能卿専一 官軍也而率二百騎
詩勢降参奥州顕氏陣 太平記 南帝八幡御退去ハ條くも氏ハを我ハ祇園執行ハ同紀抄中氏ハを湯浅入乃ハ一族と氏
氏外湯川湯浅屈ハ〻〻ハ〻〻今保ハ云ハ〻〻ハ年とあ保湯浅ハも毛利ハ中ハて湯川と記せるて
初田書湯浅山年とあ保湯浅ハも毛利ハ中ハて湯川と記せるて
太平記南方蜂起條
然ハハて湯川ハ庄司ハ軍方ハ為て康ハ瀬墓坂乃
浅ハ津を取て河瀬河ハ道宮佛ハ城を責ん〻〻ハ〻〻と
河瀬河ハ道ハ宮判官田邊別當二ハ條騎ハて押寄ハ角
八方ハ進ハ〻〻三百ハ二十三人ハ首を取て田邊ハ帰ハ
たるハ湯川庄司ハ帰ハ祢ハ作者羊瀬ハ庄司と書て
文ハ〻〻ハ鴨ハ作者ハ〻〻ハ川を取ハ入て何ハ名ハ出次
国ハ云ハ欽湯川を柚ハ使ハ比喩ハたるハ又精進奥ハ

物語に柚の皮座司といへる家も同じ職なれど此氏む
かしよりゆゑありと呼ならはしもてはやすも
むかしより流伝るを今も地名を氏も冒してゆかは
と称へて又此鉄によりぬる鴨頭方言にて江曽汲口又
上臺なといふ有り同じ筆の上臺に柚の皮を用ゐられ
義にとりて名付けしなるべし

鴨頭の名は東海の関東随筆北條言方柚子圃田池に此等を出せども麺類に加味のしを用ひ
低き草敷とあつる草にんつかげるしを読むべし當郡にては遠ひてはまどもも畢竟さこの此
るとれを今もカウトウといへりと徳園がきくる
汲口上臺亦菜る
といへるに同じ

志賀の社

若一王子権現社 東若狭の西にありて二ヶ村を総ぶ惣社なり文祿の頃大
和の其あらく志賀の十郷同じ中西は北と同じ
小井村にあり此邊以下の棟札にあり弥三を白井某といへる天保
年中旧を此境を築く時社地の土を堀る者おもむきて古墳
数ありしに完中にて骨壷及古器曲玉管石多くあり大小長短
あり又刀身銭鏃あれどもありしかど皆朽て用ひ難し
墳とも又は傍に同じ石の塚ありしにいつれのころ発しといふ社
数の中も亦塚に似たり此れども此邊の事建の棟札あれば當社を祀る
其の事に在り次上古の貴人の墓地にて
社を建て其靈を神と祀るなるべし

王子権現社 下志賀村の西山根にあり府中より六ヶ村
社の東北方にあり二人社人三人あり

誕生院浄安寺 久志村にあり

當寺は徳本行者を以て開祖とす行者父は田伏三大夫
母は垣崎氏の女なり家系は當山帝恵に出づといへり
行者宝暦八戊寅年六月廿二日を以て此地に生る幼名三之
丞と呼べり翌年中秋の夜満月に向ひて南無佛
と唱へしかば人みな奇異の思ひをなす長じて出家の志ありて
帰依し天明四年同郡財部村往生寺に於て落髪し
名を徳本と称す念仏三昧を以て勤とす後よりて白馬
山の麓に庵を結び穀食塩味を断ち昼夜七度づつ
千津川の流に垢離し佛名を唱ふる事日課に大凡一
萬遍許積く七年に及びて乱髪毛て肩を掩ひ肌膚
枯燥する事古木のごとく世にいふ雪山の苦行もかくやありけむ

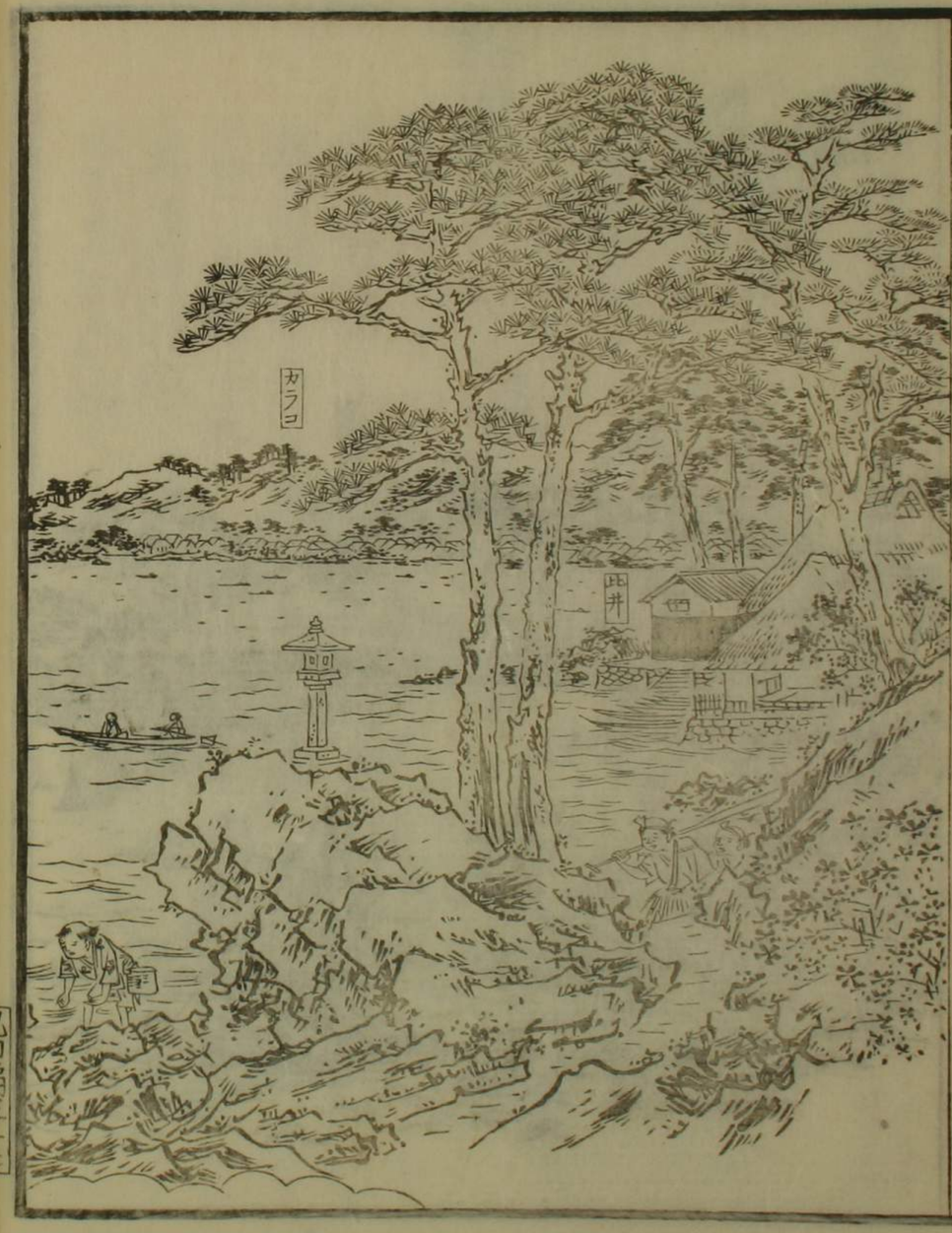
池中行者
二茶のこと
中秋の月
ふむこうひて
和てなんぢ
を唱ろ
ところ

くんといひて或時法人慈清法師自筆の名号を石に彫
一此所に棲居せり寺院なりて妖怪ありて人を害すと聞て法師澤池あるに名号碑を建て妖氣
を鎮めしに忽に消失れども法人の帰依甚しく其後奥州へ出られて武蔵
萩原村に居る事三年に及ぶて夫より又海老原澤
浦或は上田原須谷村頃れ山中岩村の地に若干し
後は柳別当尾寺に死場をしてるる文化九年 藩
よりとりて名草庵和尚山に草庵に移り此に居る事
三度更に又東都に赴く 官より石川一行院を招い
てこれに卓場一道風雲堂なりしが文政元年十月
云日苦悩に去りしむるあり金佛唱れしと共に庵
出として後をとどめ其後居る事を傳記に載せて此

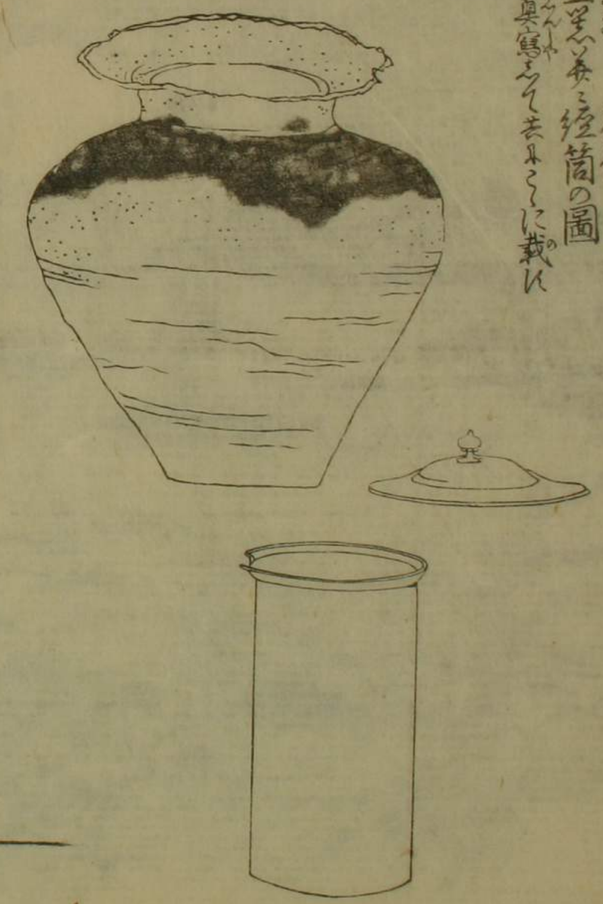
小略次拾遺者は法徳近世猫林に稱まるるに
更に老幼の別なく懇れ慕ひ慕はれ
ぶ東西に奔走し法順一念佛称名は
擔に死ぶ
ども終に人口に膾炙し其他奇特は
世に絶ることなく一派の法流を傳へ
伏羲神農黄帝社 上志賀村の中に近世なりしるに祠あり村平
門氏氏三帝の像を刻し中に紀あり
因に云ふ續日本紀云延暦十年斷伊勢云云紀伊等國百姓
殺牛用祭漢神と見えたり 類聚三代格に比事を載せ 今本國に漢神
を祭りて祠あり一當社に紀を記せしとつたへ
好事は者の所為にして紀に見えたる比類なきなり
畠山政氏故居 中志賀村に居て政氏元和の後に城を比井は海辺に城
首及数多は故去を数九遍に戦死に城を首を元去を

小浦
津久浦

ひゐ
比井浦
大平


カラコ
四井

若一王子社藏土器の内に経筒の圖
経を其玉奥寫して去れこに載し



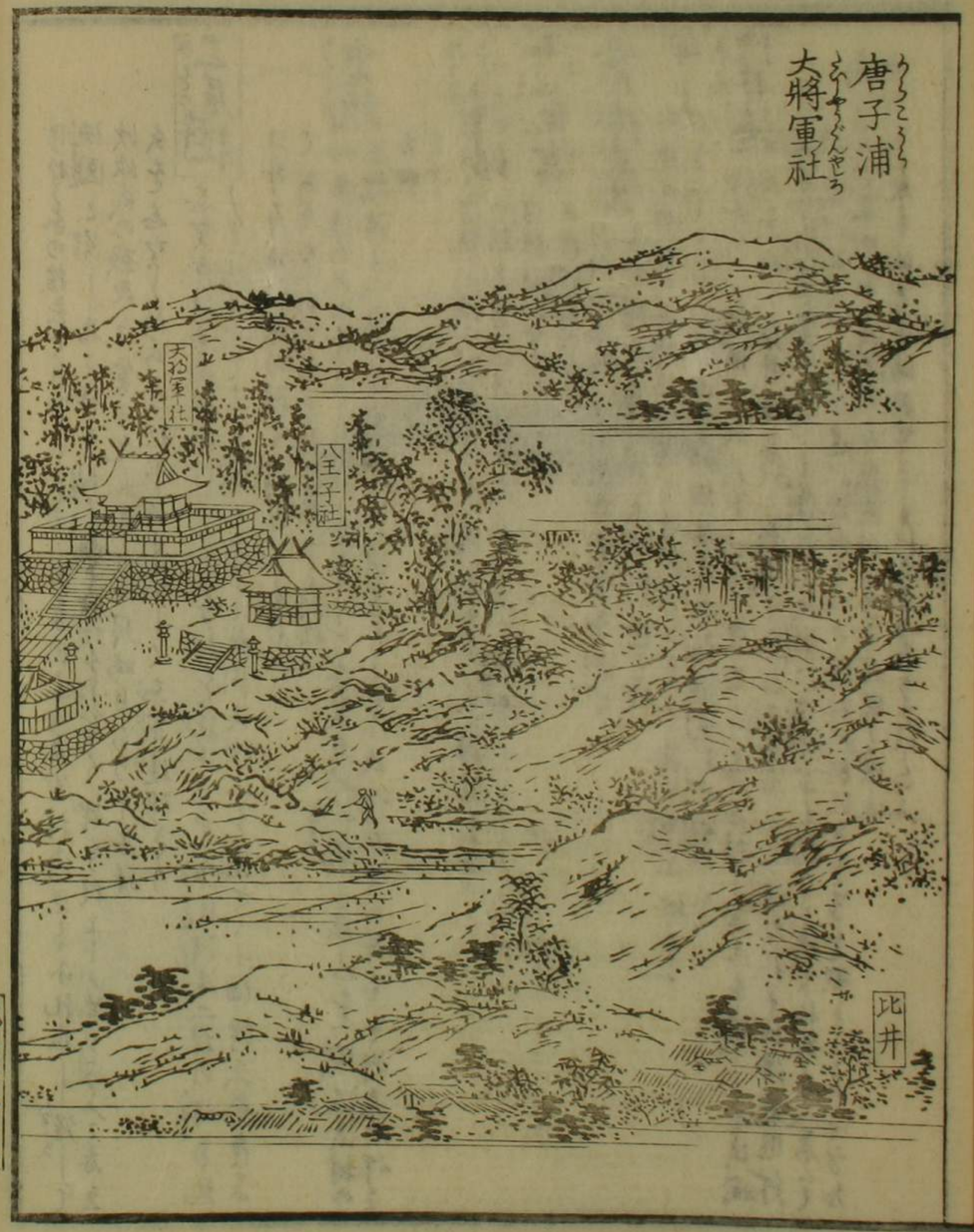
保元三年丁卯宣十月廿三日記　大檀那比丘尼尊者
勸進信阿
執筆僧名聖　時沙彌加賢

渉船場の接ぎこれを云ふ〜〜名産は赤里村通船場小名弘華一渡して
浦園と号し一為る碑を樹く粗事戰功を誇ぶり碑今粗エトノ芝と云ふ存立
次故氏の戦死を実ホ元和元年四月晦日なり子孫
氏を志賀と称ふ今秋なほ小俗しして和泉連孫なり

三尾荘　志賀尾は西海辺ホ位して九ケ村を統ぶ尾中方抗河尾二村の北南北
より出づ〜いでて大海を望む其内又波山を隔て小浦清久を養る
比井尾河尾の村く二村は〜〜なれ
て村居をなせり名村の隙ホ入る列次
方抗　由良湊の入口南岸ホ小湾をなして志賀尾は小抗と称し山を堺次氏村の
石塔海に入る所ホ数ヶ一はなれ〜〜と云ふ氏伊北を白浦南を河尾の伊と
対せり

小浦湊　方抗と磯山を堺して湊をなす小浦津久野
二村ある名次湊内ひろく〜して船繋てよし
御霊宮　同村小浦ホ祀る祀ホ御霊あり
常燈堂　同村は西端山上ホ燈明を点を建て
毎夜燈を点じ此来れ船の便とす次
甲山　津久野村の出崎ホ位して此れ形を為す其形甲ホ似るを
比井湊　西小浦小浦湊と磯山を堺し東南は尾河村と磯山を堺して氏浦
湊を囲し比井尾河村に連なり氏浦暴風何
方よりも堪ふるとつべき湊なれ又敵船満ホ入も拒ぐ波大和尤も入素なり
船の集れ湊ホ〜く比遠れ法村まで
らざる所なれば或は風波はしあり
〜或は海中ホ漂死せ〜もれたりあり
ようなるべしと云ふ

唐子浦
大將軍社



紀真狙

若一王子社 同浦ニ有リテ本社ハ熊野ヨリ勧請シテ人皇廿七代安閑天皇ノ時ニ建立シ給フ神社ハ境内ニ有リ古来ヨリ伝ル所ノ書ニ保元三年八月廿三日云々ト有リ

比井浦 同村ノ北ニ有リ海ヲ隔テ北紀州ノ海ヲ見ル

大将軍社 唐子浦ニ有リ一村

又郎殿宮 同浦ニ有リ此社ノ松ヲ伐ル又良ノ時伐ル所ノ松ハ中ノ子磯ノ岩ナリ 比井湊口

発湯井 比井浦ノ南ノ海ヲ発湯トス 井ノ村ニ有リ

古老傳云古武内宿禰養国ノ子ヲ守護シテ日高ニ来レリ

ヒタヒ此井泉ヲ汲ミ御発湯ニ奉ルヒシ次テ

ヒタヒ後世ニ汲ミ遂ニ村名ニモ呼ビ来レリ村中古ヨリ

今ニ至ルマテ発湯ノ憂ナキモ此泉ニヨレルナラヌベ

シ又當和発湯ヲ求ル時ノ潔火ヲ傳ヘシモノトイヒス

家ニ火ヲ絶サルモノアリ此泉ヲ

ヒタヒヲ用フ故ニ村中絶テ燃ヲ用ル次又神ヲ祭ルニ

湯ヲ以テ米ヲ炊ク故ニ古ヘ故ニ

檜樹 井ノ傍ニ大樹アリ此木衣ヲ田良ノ尾ヲ

の海辺ニ出多シ古人ノ云ハクノ木トス

此樹大ニ成者ハ高サ数十丈周囲数抱二月頃新葉ヲ

生ス形チ松ニ似テ松ニ似ス溜ル天僊果ハ実ニ似テ厚ク

紋細ニシテ七月ノ頃ニ至ル赤丹及孫枝ヲ

宮殿ノ次実ヲ結ブ其形花果ハ小ク小ニシテ和

ヒタヒ赤シ古人採テ食用ス次年ヲ経ル

もれそ毎枝ニ糸ハ如キ蝋ヲ生シ垂ルヒ下ル其擇ニ此ノ如ク

下枝ニ至レハ又蝋ヲ生シテ其擇ニ此ノ如ク

次第ニ金下ニ至テ其末絶ヘ地ニ入ル根ヲ結ヒ更ニ又

蔭葉ヲ生ス次ニ其葉モ又年ヲ経ル故ニ後ヒテ蝋ヲ

ヒタヒ始ノ如シ其状毎枝ニ麺ヲ垂ルニ似タリ小児ら

産湯井
榕樹

誉田天皇の御産湯
ふ用ゐ給ふと清水
の湧もとゝ根幹鐵ろ
ぬく枝葉扶疎已て
立る榕樹ハ枝ゝふ
糸の如き嫩條を
たゝまして奇状貴そ
多ーとへども散木ー
さそし世用に充らざれ
倖に匠石の斧を
免るゝことを得
り

産湯井

鬚に似て細く代て土を垂、久しきを經ては長き者は數丈にいたる。其枝霖雨中にられを地に插によく根を生じ、其幹太なる者は其中空竅になりて鑽撓くえく、材となりがたし。此樹すべて梢に菌を生ず。オホギタケといふ。味美にして毒なし。これ樹薩摩あたりの方言アカウといひて、海邊の處に多くありといふ。本州にても此あたり海濱のみに限らず其餘他所にも稀にあるを見る。劉恂が嶺表録異に榕樹桂廣容南府郭之内多栽此樹（葉如冬青秋冬不凋枝條既繁葉又蒙細而根鬚繚繞枝幹屈盤上生嫩條如藤垂下漸漸及地藤梢入土根節成一大榕樹三五處有根者又横枝著鄰樹則連理南人以爲常不謂之瑞木）といひ、品字箋に榕惟生閩中福州尤盛故號榕城といひ、嶺南雜記に榕樹閩廣最多他省則無故紅梅驛以北無榕といへり（以上小原氏筆記摘要）先年近村の者漂流して薩州にいたりしに實に嶺南雜記に書るがごとしといへり此樹

火氣に觸ときはおのづから水出て薪となりがたし又枝にも根あり汀渚にあるものは塩に耐て蛀ず。これを舟のつなぎにおほく用ふ。其他用なければ所謂散木なり人に近き處に伐て捨るもの多し

向鬚明神社（江尾浦にあり。河尾にて濱と同じ。濱村に鎭座なり）

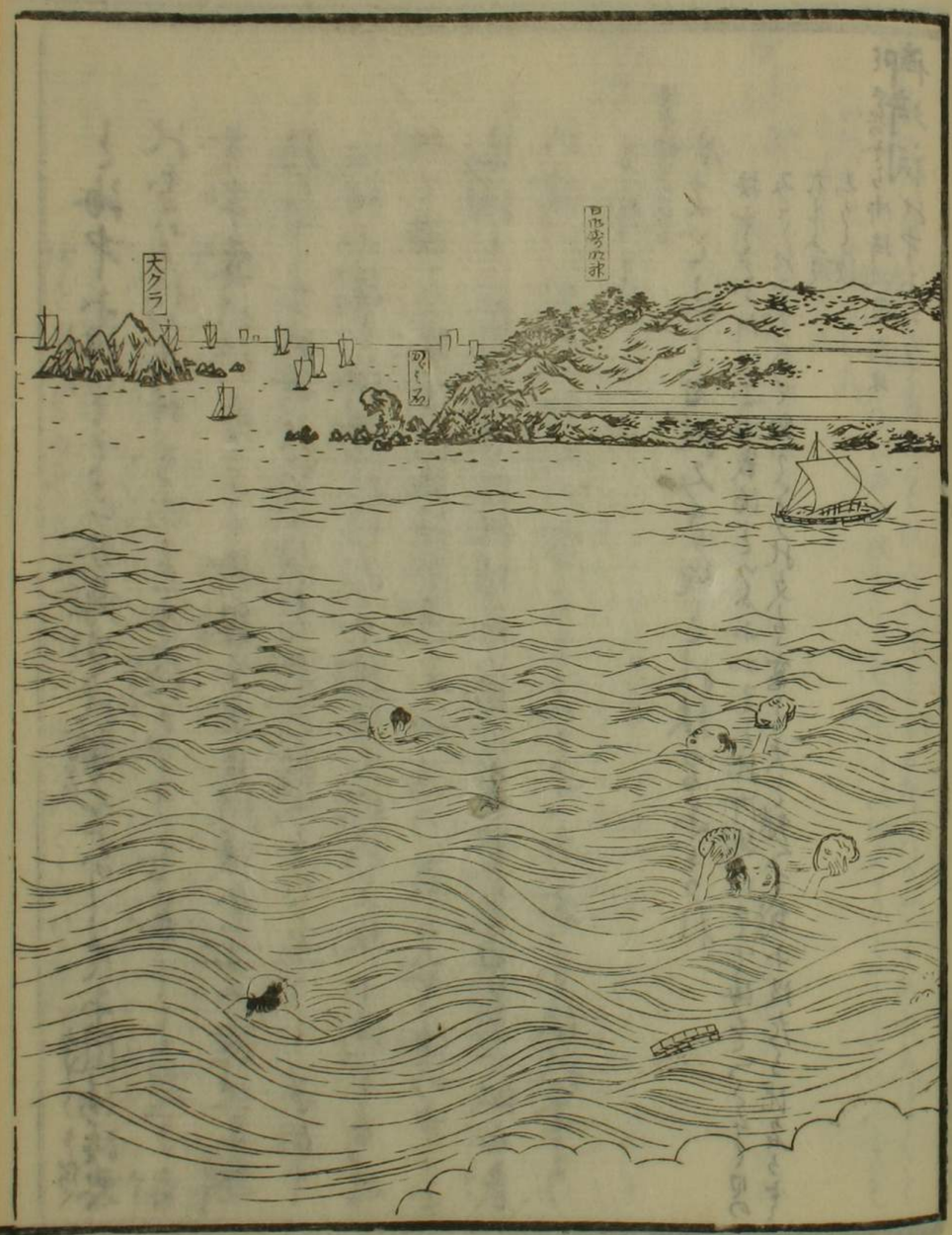
海光山光德寺（同浦にあり。當社寛文乾元に至り了の殊とあり。宗西山流なり。寺傳に熊村中に今藏寺といふ寺ありしが、文明十六年浄誉道名一向宗に歸依して改宗し、後寺を今の地に遷すといふ。蓮如上人の直弟なる村和寺の浦へ此に逃る村民等織の岩窟に匿れ、次ろ月頃にして夜中に和に載せ和寺の浦へ送れりとぞ）

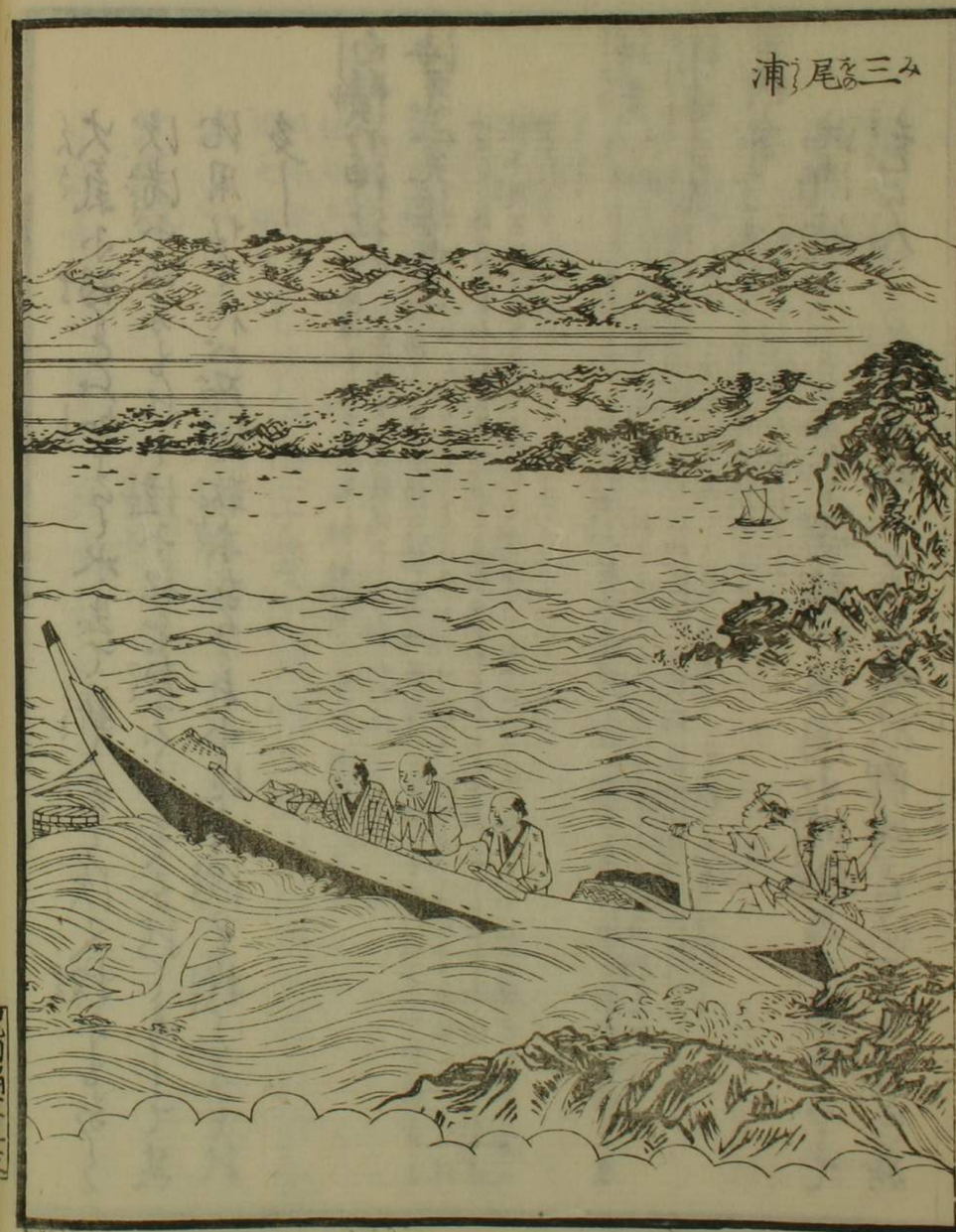
鐘突（同浦より西にさし出たる織山樹林蒼々たる下を鐘突といふ。神功皇后御上陸の時鐘を枝に突せられしよりその名起るといふ）

御茶屋石（同浦北向田坑より同じ御崎に至る織山巨巖蔵々として中に四方坦なる一巖上平にして數人を坐しむべし）

同御崎（三尾村より坤の方坂路二十三町にして至る。又番所あり）

此御崎をもつて究とし、長鯨の波間に游泳して西を正として也らんとするに似たり。然ば御崎の東行の足を指すに渡る


大クラ


三尾浦

と海中ニ横ハリて二分鼎足をなし其ニ風清浦悪
れ共なれば乗師等ものを怪るゆえ也しかう古
者年業れ行幸ニも御船を由良れ漕ニ留め港地ニ趣
給ひしに此浦れいうべひを過け給へるなれば甚軽
も猶不揚も所漢れ行ひ山て漕ゆく船れ其帆ニ速て友鶴
他等浦を右ニ見れ海法ニ遠て俳徴の叢を離の中ニ
出沒し市江崎の松れ緑を長く蓼雲を留ニ似良
の濱れ白砂ハ北時の雪とも見えて打寄る波れ素よう
も白し

堤中納言物語云

かまど山と日れみを紀と見れ緑るニまれ

按ずるニ河内ニ由緒ありて海を隔て見の
みを紀ニ見ニ遠ハ物ずるれ文を竈と大と書て或ニ役たる地名なり

御埼祠 御埼れ奥術味 れ中ニ有り

御埼ニ有り 埼れ奥術味 れ中ニ有り

かぐみ石 御埼ニ有り 埼れ奥術味 れ中ニ有り 義なり 形人れ接を為めたる紀ゲ如し 古ニ名ばくと
つゑ又ハ嚴也 ちニ有れ石ニ肤もぐるを以て日れ潮ゆるりとそらくつゑとそ
ぐ流れ 俗流なれ ぐ流るる 翁ぜ次

美保浦 今ニ尾浦と書次和田村より磯山を繞て西る約拾一里漢ニ多し 此浦
の額を三尾うらとつゑ又海底ニ入く艶を見れ漢夫も多くいりたる
名先 名先
と次

風早 同浦れ海辺南れ方ニ依うらとゆれ叢もつる所をカザハイ又アミダバイ
とつゑカザハイを風子れ書使ゆれ紀べし 又指屋浦れ振嶽山をもカザハイと
つゑ此三尾浦より海上や浦てうれ山を見れ三尾浦れカザハイ
万葉三 加麻能夜能美保乃浦廻之白管仕見十方不怜無人念者

或云見者悲霜無人思丹

風早之三穂乃浦廻乎搖舟之船人動浪立良下

風莫乃濱之白浪徒於斯依久流見人無

按ずるニ風莫を古人ハ書困れ名所とつゑ紀て
寛文れ頃ニ風莫ハ古人ハ書困れ名を書ゆゑ年業弘前戸時の紀ニ
知とつゑ入れ古べしとつゑ人ハ書困れ地の古名
れ書くれ共風ニ有れ白浪れ寄る事ニ有れ共多ニ有の事
を不審を以て風莫れ風早の
浦をとゆゑ書ニ有れ共風莫れ懐古れ書困れ地名なるべし

久米若子
三穂崎より
篭ゝを
望む圖
拠ふか
若子の
事跡
今伝ふ
其九さを
万葉集
久米ゝみよ
いりゝろに
よりれど
其人の流居
さゝれ

万葉集
法況終ゝを
ひれども
ゆゝ
夫木抄
中ゝ日記
いゝうゝゝ
中つゝ琴
松ふゝゝふる
ゝれゝゝ
為顕

新撰万葉

海人乙女ら浦邊の白鄰潟ゐるみてふれてみてふれむ　光俊朝臣

同

絶えのこる藻は焼くの風早れこれ浦こ水焦こるり　信實

龍王社　同浦の奥に在て塩竈中に祭り

光明寺　同浦に在り浄土宗西流光往室外弟子多く住へり

みやれ釜のようしひあしこ和浦の藻屑　窓卽

和歌浦　三尾浦の西面海湾の中に在り周廻三四丁許頂上に松二三株あり

三穂の石室　三尾浦乃海磯にあり穴中大巖窟あり窟中深さ十五丈内一人

大小の巖むら立て七八丈ばかり海上に面して波の音

崇なり　上古の岩屋なるべし今考るに武地名を考へ

崇宗院の墓八万葉集に見えたり

てよめりとおぼゆ　上の人等清めて家の白に志賀縄を

みゝとせ　よりも人等清めて家の白に志賀縄を

よりも西に　万葉集三　博通法師往紀伊國見三穂石室作

皮爲酢寸久米能若子我伊座家留一云家年三穂乃石室者

雖見不飽鴨一云安礼尓家留可毛

常盤成石室者今毛安里家禮騰住家類人曽常無里

家留

石室戸爾立在松樹汝乎見者昔人乎相見如之

見津見津四久米能若子我伊觸家武磯之草根乃干

巻惜裳

夫木抄

紀の国のみやれ岩屋もさもる牧風こそ吉る松に吹るゝ　定圓法師

五社百首

古れこそ和れ岩屋こそ吉むしてみるとゝ波こそ　俊成卿

室治二年百首

家恋ゝ和れ岩屋に和ふ雨のいづくもとゝ人ゝ　衣笠内大臣

小池荘　三尾屋の東南に在り中古荒廃中交の祢代り村と称ず

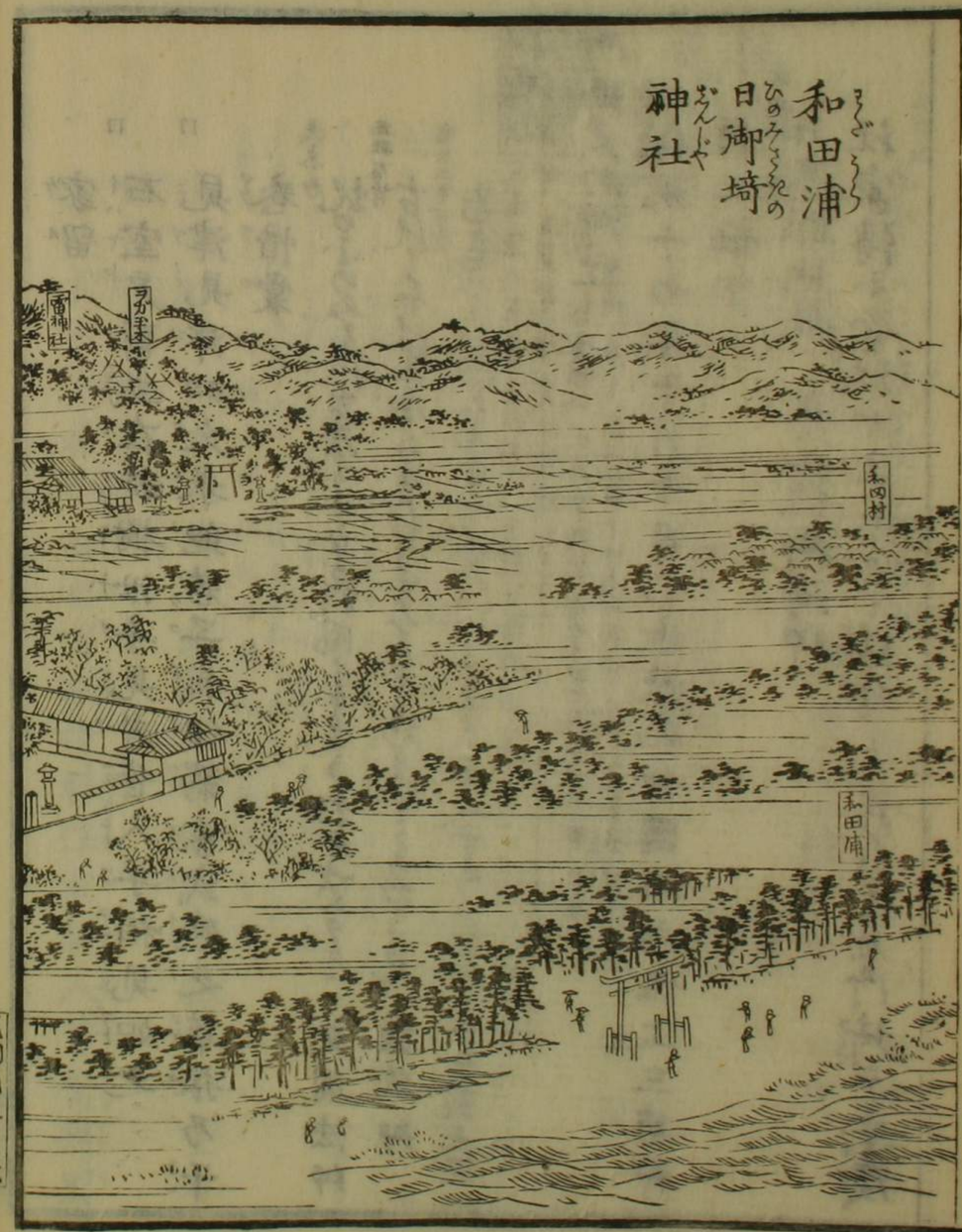
御埼大明神社　和田浦の小名市紙に社を建て交の名とす

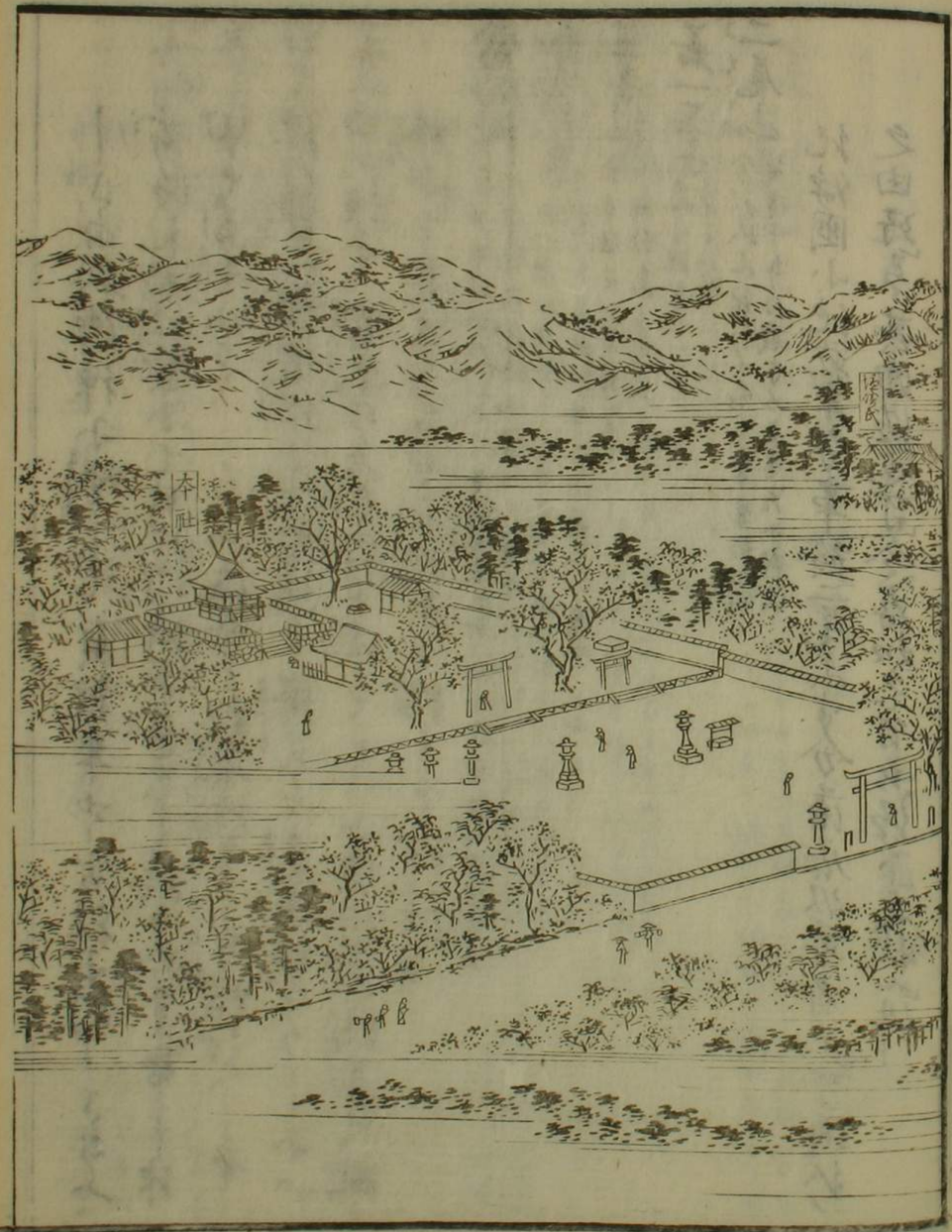
三代實録云　貞観十七年十月十日己未授紀伊國正六位上三前神

従五位下

本国神名帳云　日高郡地祇　正三位御埼神

社家傳に當社々上古より結界して日御埼を守護


和田浦
ひのみくまの
日御埼
神社
南神社
和田浦


本社

しゝゐの御神木なりとて貞観年中官社に引しゝゐの
社殿壮麗にして日比御崎をとゝのへられ恐敬尊崇し
田も若干ありしとゝ云ふ後世こゝに廃絶せしを惜むべし
社の傍に齋宮跡と云ふがありて齋宮を置事社ゝゝしかい
つれ須ゝ富安の庄九山村に遷ゝとゝ云ふ境内に焼荒れ樹
林ありて其大なるを二抱ゝも候ゝと伝ふ

雷の神社 摂津社に持社にして幸社の長人町にあり雷除の守符を出

和田松原 和田浦は海浜より古来田井浜は激流に流村に接して
此辺法度は激流に依て無数の大材あり

王子社 古来海に向ひて鎮座

若一王子社 小池村

二尾山 今は八山村にあり〻〻年号紀二記
村持十年の載る文書は九に載る

紀伊国小池荘半分幸給二尾山半分落居以前者不可道理
之由所望其沙汰也可令存知之旨仰下之状件

正平十年五月十三日　九中納言

地濤小山一族所申

入山村の山下小河の内にあり由定は
文保十一年二月衆京浦にて三好氏と戦ひて切り殺田失より日
言紀字京所を考せ〻〻ありしとゝ云ふ由定は
豊臣氏小仕へ紀伊守と改むと云ふ
地址の西一町小天満石塔一基ありて天正三年七月八日の
文字ありて其他多数古人女子墓と云ふ伝へ

八山古城址

女郎墓

財部荘 富安庄の西南小
ありこゝ村と称ず

財部郷 今廃して財部村存せり建暦文書に宝と書せり今文下除に載る強
日宗紀大寛三年八月令記伊国阿提版高年妻三郡一歩銀と云ふ氏遠
銀を鑿しも其所あるより
財部の名ありて考へ難し

王子社 財部村

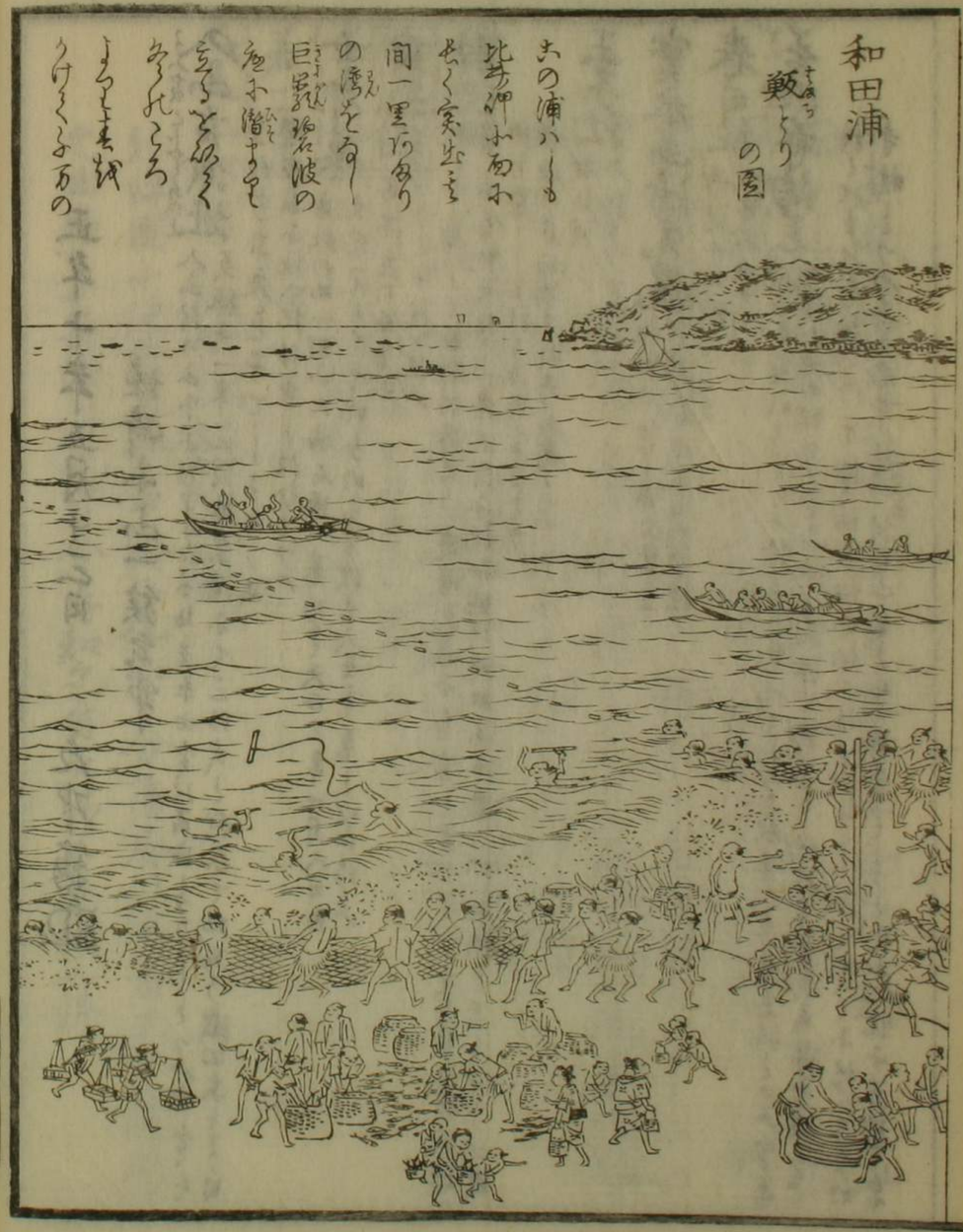
寶永山清光院 日村小河にあり浄土宗なり
了慧上人宗後改宗次

春日社 傳村の新小宮

若宮寺淘堂 日村小若宮もと八幡の須佐世の社なりと云ふ
の須佐世の社なりと云ふ
社くれもれを焼失し天禄伝多〻今も変し小伝へて若宮
寺焼と云ふ古来桜井村の山宮より遷来せしとて小の地小若宮寺

和田浦

敷とりの図



大の浦ハ二も
北方仲小西ハ
長く突出て
間一里ハ有り
の湾を為し
巨浪碧波の
色ハ潮を
たゝへ
たゝへ
たゝへ
もとより
けくるる万の

とゝ
海ハ
東ハ海
ハ
十月より
で
候
海
大凡一日ハ
多き時ハ十万
ハ
ハ
ハ
ハ

の名
あり

薗荘 こゝ村をもそぶ紙
紙面の南小橋し

新宮神庫文書

呂使孫井近里

院廳下

紀伊國在廳官人等

可早任□寄文并國司廳宣等為熊野新宮領
使者國使相共堺四至打膀示令立券言上薗宮
卿壹處事

在管内高郡内

四至東限泉水除西限四井船津出井南限其四
兎石窓島小限蒼柱九寸大除

使公文右籍官史生紀康直

右去月日□寄文稱注拾案内作所者地立永
為社領也而者由緒所傳領也仍今以彼郷所寄

進然聖形宮御領也彼郷所當永命注文定佰玖拾
斛内新宮陸拾斛称宜給本宮貳拾斛三昧僧給那
智拾貳斛社壇承仕等給如此可完置也於物玖拾
斛者一院御幸小松殿御宿大粮料也此外可免除
勅院事造内裏御願寺役夫工及大小國役等之由可
被仰下也兼又於領家強者可□相伝之由同
欲被仰下宣請庭裁任叙映旨被裁下者將作憲
改之貴矣畧

建暦二年二月　日

薗八幡宮 薗村不詳。こゝ社敬をもふまとり来中れ者来伝多く當
社もこゝ村の小小八幡宮と称せらるゝ例多く八月十八日当日来式
御敬を建のひしゝ行なりしとそ社号と或いは小外八幡宮とも称
の中不載歟編とそ御坊の高方八十来以上の者数十人各似来游る笠を被白帷子のうへ
是を着紙のみをもはをを一先一番小一大幸弧をもて紙者以小傘をもてる者次く
大鼓鉦鼓小ともてる者伺歌小合してうちうちらるゝ一列小随てゆく事ゆりに事へつのとき
張をれ多小洋ゆうゝ以孤小正德四放生會の古事を記せり三飛龍小器をもるゆ大ゝ
元和の頃　表上これ頃を又をゆゝ以多ひて御敬祭ゆゝ又三後宮改のもゝ　天上

物不當材の者不沙ひ一御書ハ下ニ恩状として今も案日
先この文を漢ひげくさて編ものくしたまふ文不日
四恩状

夫人間不ハ恩ハ四恩とハ天地の恩父母の恩國王ハ恩元生の
恩なり元人なるもれハ上ハ天地いたゞきて日月の光と作さ
下ハ地不載られて人教業果と食ひて一生をとるもれハ
勿論一日も天地の恩を忘るゝ事なし次ハ父母不文く
よりと産育養育のゆゑ乳母ちゝ稚子ハ若労と次育ていげら
まゝ成長されハ一日も父母の恩と忘るゝ次
文ハ成業不ハ妻子と共ひ妻子をたゞくみ仏ハ
主人ハ代ハ安穏不當次をみる君上の御新なれゆゑ
一日も王ハ恩を忘るゝ人ハ一生ハ内不をさゝ乃
事ハ奉ハて自力ハ世をとゝ乃ハ叶ハ法人の力
をかりて不思と補ひ急難とも救ふ事ハ元生の恩と
又忘るゝ人ハ仏ハ忠孝の二つよりて主きるゆゑ
みをゆゑハ恩のうち不もとりとけ父母の恩國王の恩と

忘ハ不ハ孝行をあ乃ハ國王ハ法令をよく守れハおのゝ天地
ハ元生ハ元生ハ元生ハ戻らゞして全き人ハ
となれるなり

奇瓢之図

園八幡宮
我孰浦の圖
神燈

奇童（きどう）　愛安れ頃當村小寳川作次と云ふもの有り　寳子源左衛門と云ふ
大つゞみを打つまを紀を受安元年四月三年に来り
まで　樂中へ召されし日四年七来りて仏道を
附打一ゝ　御貨の所まで樂されゞけ
村中小市郡志御坊町を以て村を
志ゝ打を建て市街をなして郡中
御坊　村中小市郡志御坊町を以て村園村笠小橋
志ゝ打を建て市街をなして郡中小てゝ
寺傳云湯川氏郡少輔也光攝州江口小て二ぬ長慶と戦ひて敗小
せ一附市願寺法小上人也光ゝ軍を助けく騎馬二十人を副へ
て小松原に城小帰ゝ志ひ也光其恩を謝せんゝめ小天文
元年郡中吉原浦　小沈在小房次今れ　松尺寺に城ゝり　小一宇の堂を建立一
堂号ゝ小よりて立田郡星尾寺に河弥陀佛を安置一男治
郡少輔法名乃祐存を住僧ゝして生家を呼へ市願寺小池
順せ一ゝ上人自に肖像一幅を絵ゝて見を貴次裏書ゝ
市願寺釋法名判釋那如来天正二年乙亥三月九日書之後
以上人ゝ新紀別日田河郡吉原坊舎常什物ゝ云ゝて今も
存ゝ後年也妻吉原浦ゝ薗浦の古に城内小遷

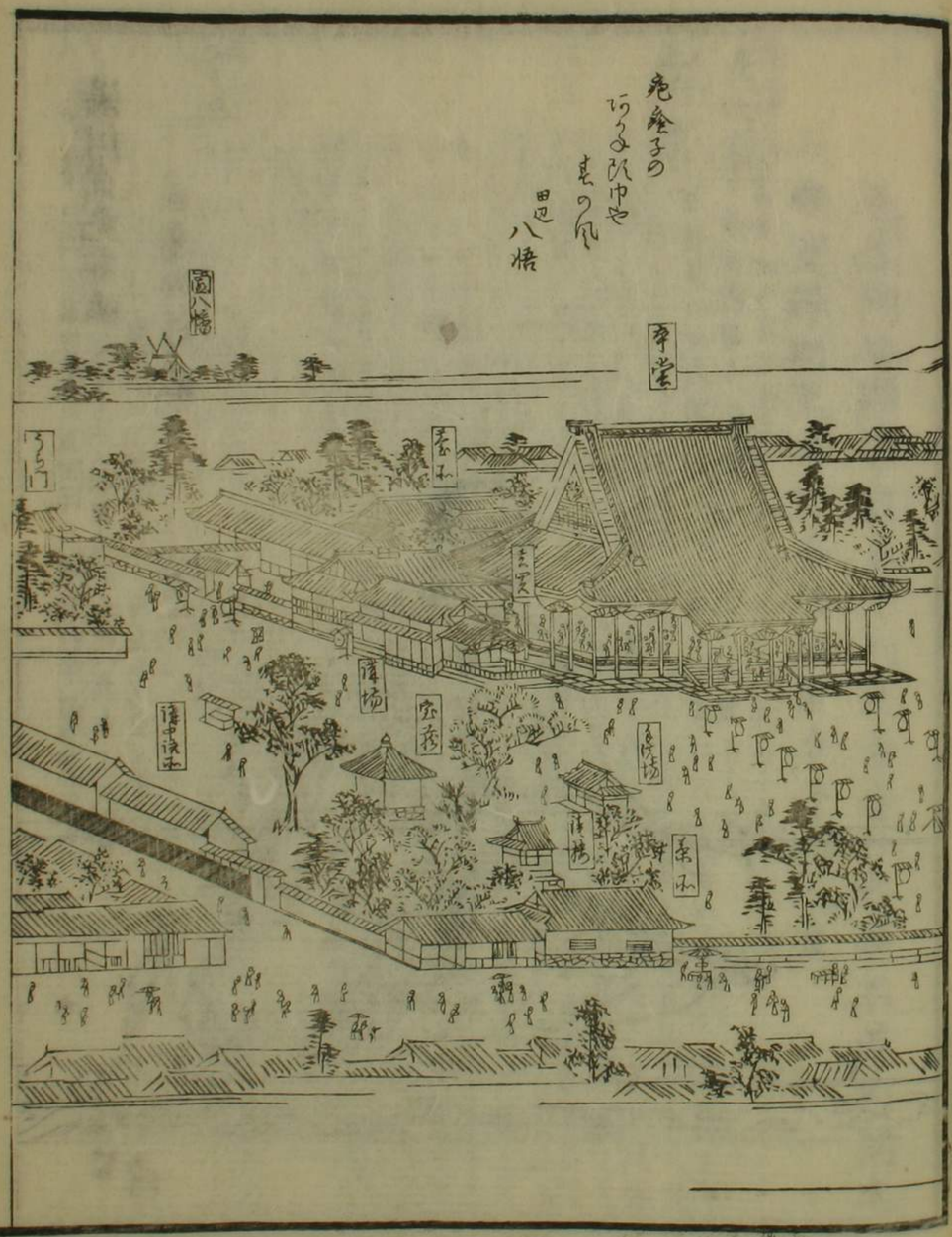
一文禄四年伏武伊賀守　浅野左衛門尉　此地小遷次ゝ
湯川也光草創に成ゝて其肖像を置ゝ
るゝまで　菩提を訪ふゝいと懇ゝ

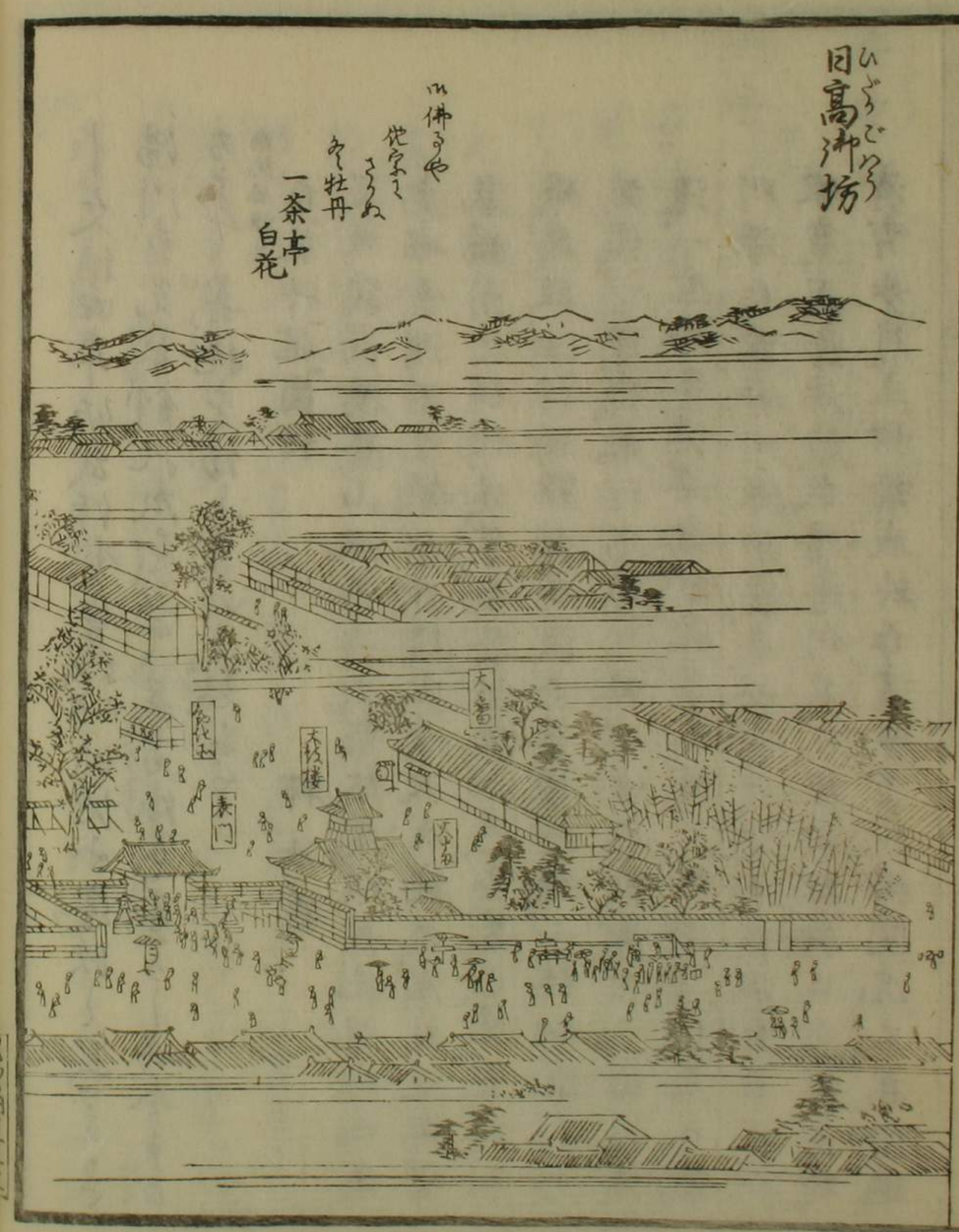
南紀風雅集

釋法霖

自龍神還薗村

迢遞關南萬疊山温泉浴去悠然還仙源花落何由達
虎嘯雲深不可攀今日得出連天之棧道湍接逆旅瘴
嵐顔園之村何遠茅屋縈紆繞江湾昏暮已投舅氏家
総忘跋渉行路難紀水濱吾舊廬彷彿山林烟霧間天
若借一一雙鶴飛行不勞北轅咨嗟殷勤謝主人留吾縮
得一生間愛惜海南好風景山可上居江可投竿人説
川源自龍神川源繚繞幾林巒還恨本在温泉日不以
家書下急湍悠哉勝遊何其已探詩探興且忘餐或時
清宵歩月立村橋或時白晝穿雲扣禪関況又高僧遇


田辺八幡
本堂
鐘楼
大師堂
清水
宝塔
薬師堂
本坊
清中法王


日高御坊
一茶亭
白花
牡丹
大師堂
大玄関
表門
本堂

湯川直光肖像

日高御坊藏

吾厚問安贈菓自長千知是豪奢壯游事不若民間逸樂安歸期至矣可奈何與君分手向人寰

矢田莊

冨安氏の家に所藏せる文書に名を正平十四年に注記あり又冨安氏の家に所藏せる文書に名を正平十軍忠考に正平韋とつふ物矢田より出る物

正平韋

られしをもつくもび當時摩事國にて製せしもれるべし矢田莊鹿苑院公方へ紀伊國矢田莊より甚板行すべく避せられしをもつくもび當時摩事國にて製せしもれるべし矢田莊

としつふもそらくろえ次正平を南北の年号にして甚公年号にして南北一統して

小野親通は野をとぶらられ天下魁正平は号を廢ぬしに小野蘭和分れて

南朝を統ふもびとを統ひしーとどと韋号を統しーく武韋に止れアとしつふ

でーー旦年号を復南朝の仕せさせ

出しーとしつふすうぶく接ぶくぶるる又業沈抗し統紀乃附録に天平韋乃

お板を正平傳免韋と稱次武板に正平公年公月初日とつり法正正

法は接與をそとしつひ又或説に天平韋とつふ名を近世に沿に出れ

所にーて古書にそええびられ古を再韋としつひしーもれるべーとしつり

北軍考預書補正をにも考しーくええた是今韋國にて製せしー光徳

千津川

川と名を村名しー次武川係左四郎

今ふ此年強年初去られ川高に城新しーて石上に城ぜーー金佛縁起せしーよ

これをもを製ーーを遣ーーを初に村に川に

○愛徳山王子社

冨安ーーを遣成寺へ所る初に藏

矢田村に厳次陽韋記に又ーーを

○八幡宮　中山社上下にあり即やそくにふくにふ敬國男山より勧請ふ法師とつかれ神を仮本ふ
○くくの王子　日村社社下にあり或仮ふそ乃ふ神を仮本ふ
をうづきとしてくの神を祭れてとつり

御幸記云
十日　暑次又愛徳山王子次クハマ王子次寄小松原御所云云

○清巻　七ヶ村の枝郷なり道成
寺門前ふ松舎にあり
○道成寺　日所ふにあり天竺宗ふして
天竺山子を流しつ

本堂　長約十間半　本尊千手観音　長一丈二尺寺伝ふ著氏ち社所へ
御屋ふ光もれにつて一人社海士海中ふへて探るふ一寸八歩社圓体檀金の千手観
まれ係うれ海士社髪ふ手ふひつりて上らせ給ふ氏徒を掘りの内ふ入まして今乃
本尊一丈二尺社
係を刻むとつふ　脇士日光月光菩薩　長八尺　釋迦堂　護摩堂

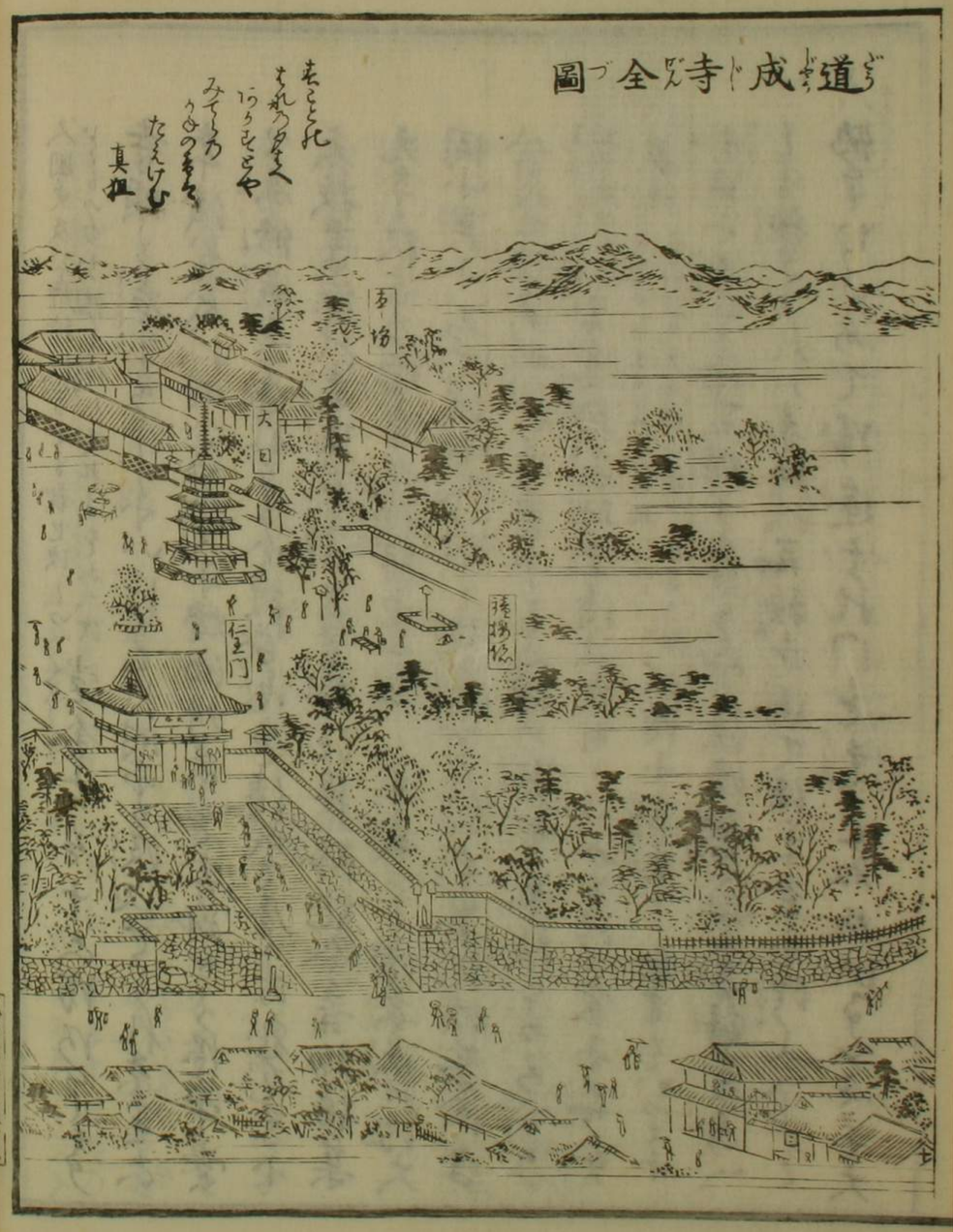
常念佛堂　十王堂　三重塔　楼門　今到力
門上にあり

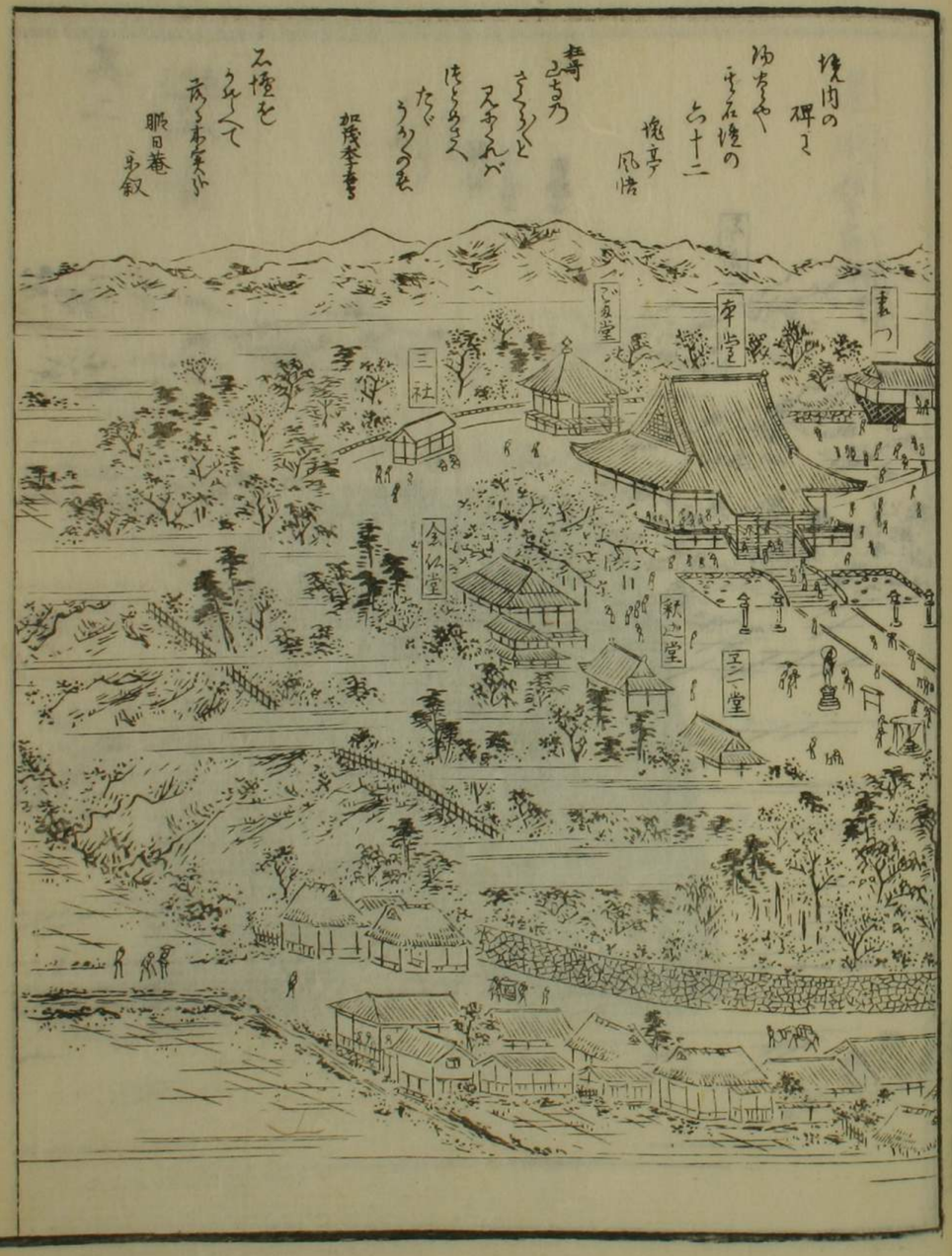
當寺社名天下ふ少えて然ふ参詣社絶まらでばるふ社ふ
一寺傳ふ　文武天皇の勅願ふて紀大臣道成公奉行して
建立せられ名紀ふ始ふ出現せ一千手千眼大聖観世音菩
薩の霊場ふつとつへて　文武天皇勅願所社本名三年寺中社絶乃
紀中ふ又えうう建一して紀大臣ふ成とつふ

人國史及公卿補任ふも載せ次とつ
どもつふ乃ち伝ふ法ひて社きをかへ次

堂舎古ふ十六坊乃ふそ
寺頃ふ若干ふ一一ふいたとれ附中ふ没収せられ其文也ふ
年後ふ氏社附ふ更ふ燈油料米を寄附せ一原本堂
ふ屋修造を施れふ今ふ社ふ古危を傳へて屋上の鬼瓦ふ
天授元年孫社年號を遣さふ　拾法華験記今昔物語集
元亨釈書及當寺社縁起ふも載ふ傳安社伝大
同ふ異ふ為て後世人口ふも松象ふれば今暑紀次延ふ
八月の頃実刑ふて月同ふ傳の絵ふ奈伝ふるふ
元亨釈書ふ駐ふ社　年曼弘法大砂墨清次庄司ふつふ家ふ者ふ
其娘　安伝ふ女ふ社名を伝ふ次の庄司社伝ふれ
郎所ふ至て迫て婦とならんと次傳ふるふて古辞ふふつへ
ども独さ社ば奈伝社者頼を遂て後ふ意ふ伝ふ
偽てけ社めて帰途ふ社門を乞ふ社氏ふを乞て大

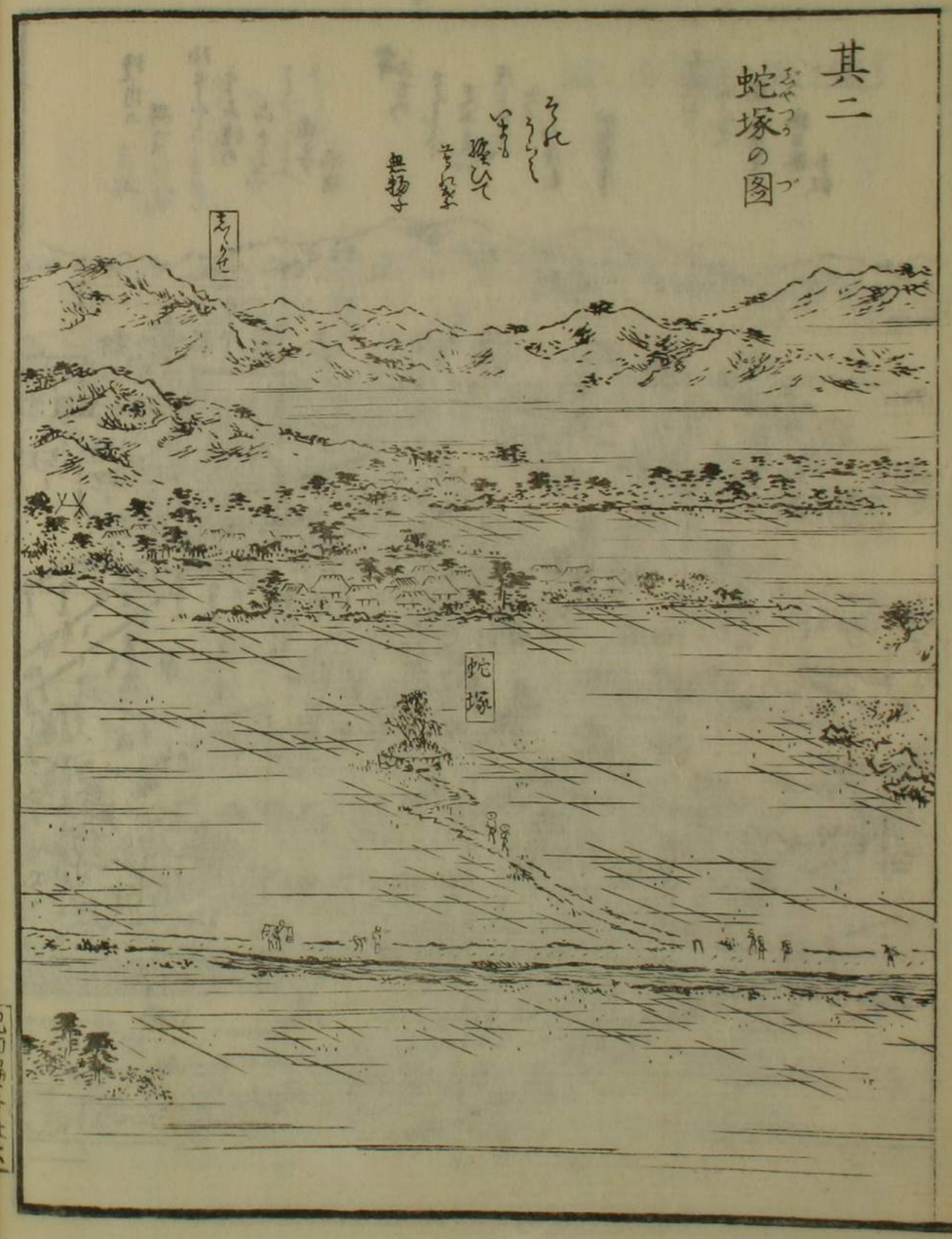
道成寺全図





其二

蛇塚の図



道成寺古瓦

一尺八寸五分

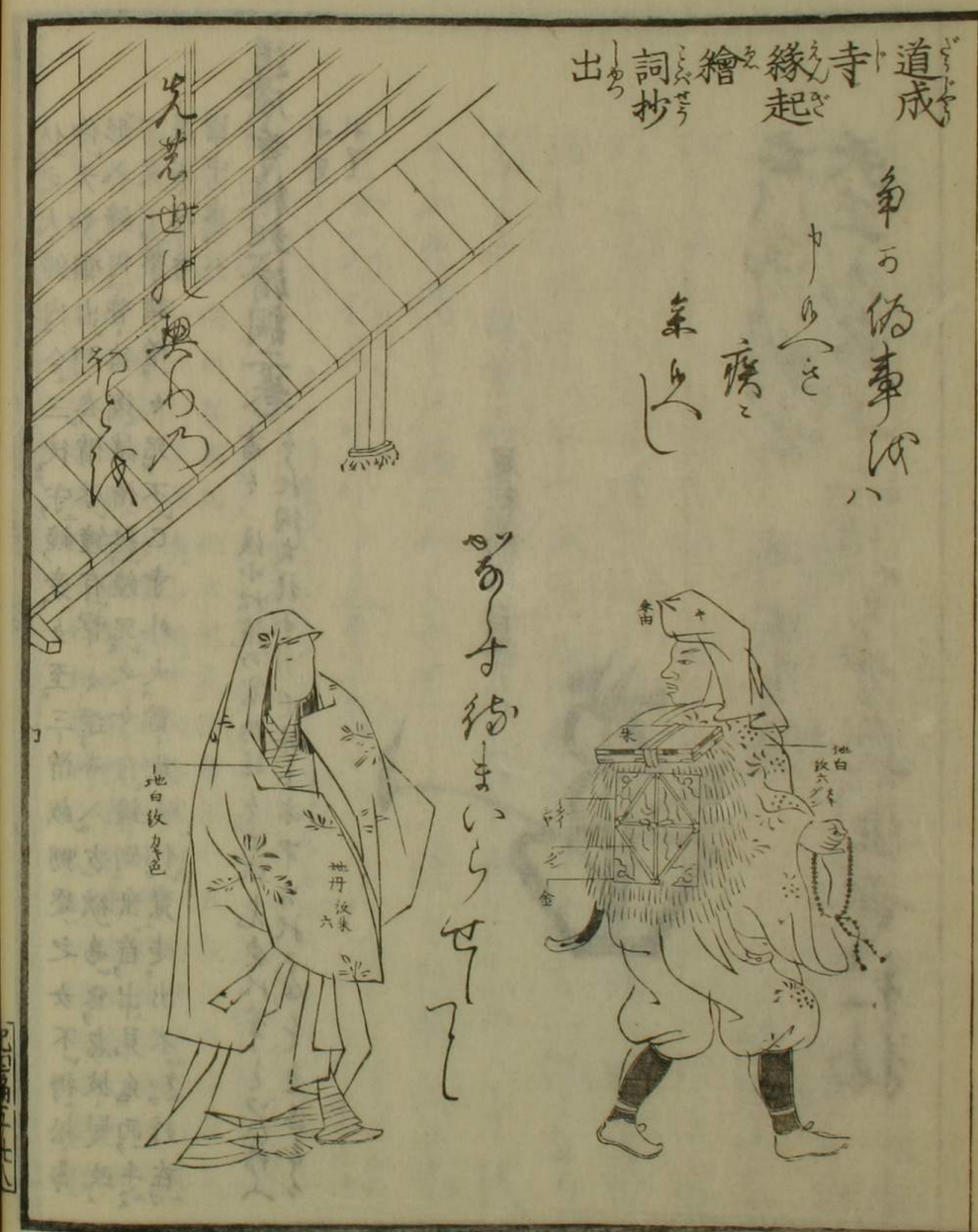
小怒て狂奔して家を出忽大蛇と化して逐来れり僧當
ちに小元に入て其あるを皆て救ひを求む元徒等大徒を下
して僧を覆ひ隠くす嘗を呑まんとすれども叶はず妖蛇尾を
以て戸をうち碎き徒を搖ふ小大饒めえたり蛇ハ小くの
如くにして元徒等を傷して中を入るる小僧を嚙骨ま
殘れて粉々たりて或老僧の夢小僧も妖も二蛇ともに
来りて壽量品を寫して若道を免れんと志めんる或
元ふ老僧ありて額のめくふせーうべ僧を擲率天小生
る女小切利天小せしと又夢小告ることけむ 掘ぎるる小清人徐孫光
國樂伎を記せー本小徒魔れるとつふ小つて強曲ぎる小他れる妻孫が有るゆ小
よく似くうかれたちを古ようう皇小国のまぶうるくハ
てれ侵伎小とうるくるを元主まして小ぶ小帰ぬして似くて 皇国のまぶうるくハ
中城縣姑場村農家陶姓有兒名松壽年十五歳白皙端麗至
首里從師一日行至浦添山徑中向昏黒持一竹竿點地行見
燈来宿乃十一獵家父出夜獵上一女年十六頗妖麗留宿挑之
松壽拂衣起女羞且怒持獵具欲殺松壽松壽走女逐之山曲
百方壽寺主持僧普德頗有行松壽奔入乞救四顧無隱處僧

伏之大鐘内令三徒守鐘旁女至三僧戯嬲逐之女不得松壽
仰天如癲出門衣僧啓鐘有聲女還奔入方欲為惡忽披髪改
形入鐘内普德與諸僧繞鐘咒之女自鐘倒出首出見鬼面手足
一又下擊諸僧々咒不已寺外大雷電女化蹇走出不知所在
是百年前
國中の事云

道成寺縁起繪詞二卷 書々 後小松院の宸筆なる古体光典の筆とつたへ
ふそれて 又同古雅小して絵も亦中古ものを思ふ

足利義昭自筆

右之御判者
天正九年十二月日至奥国寺被移


道成寺縁起絵詞抄出
地白紋
朱
金
地丹紋
地白紋

老僧は
つれてゐる花のひらめ
さかの人にとハ

其二
七八町
七八町と
十二三町

其三

女房にはゐ頭し

あるく　忍屋

いまるゝ法師ハ

うるゝ人体

見はすく

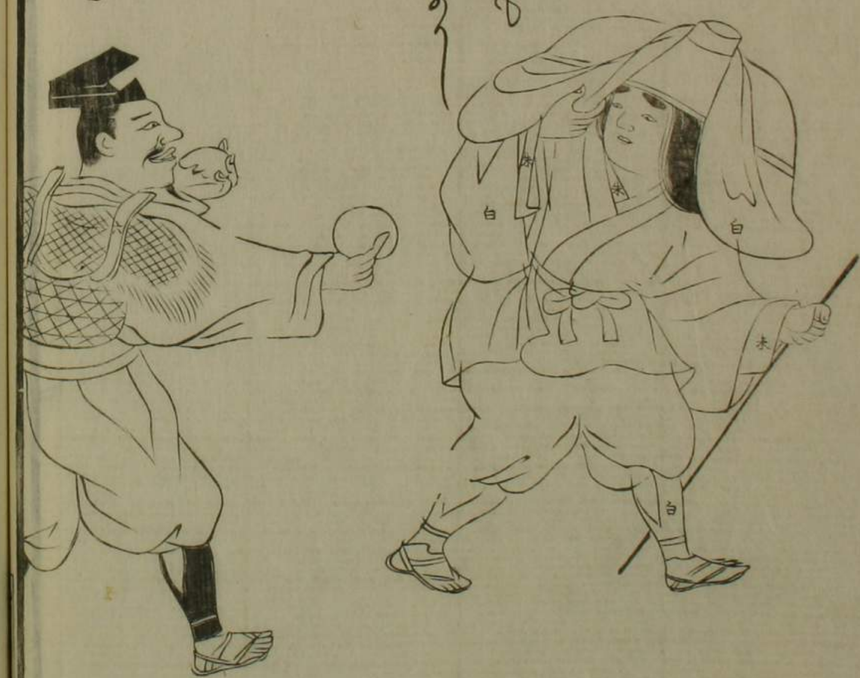
其四

其五

人若わひきらんよ
を法ろ
さハ
いそ

きもろ
ろの
まくらきひな
せろ

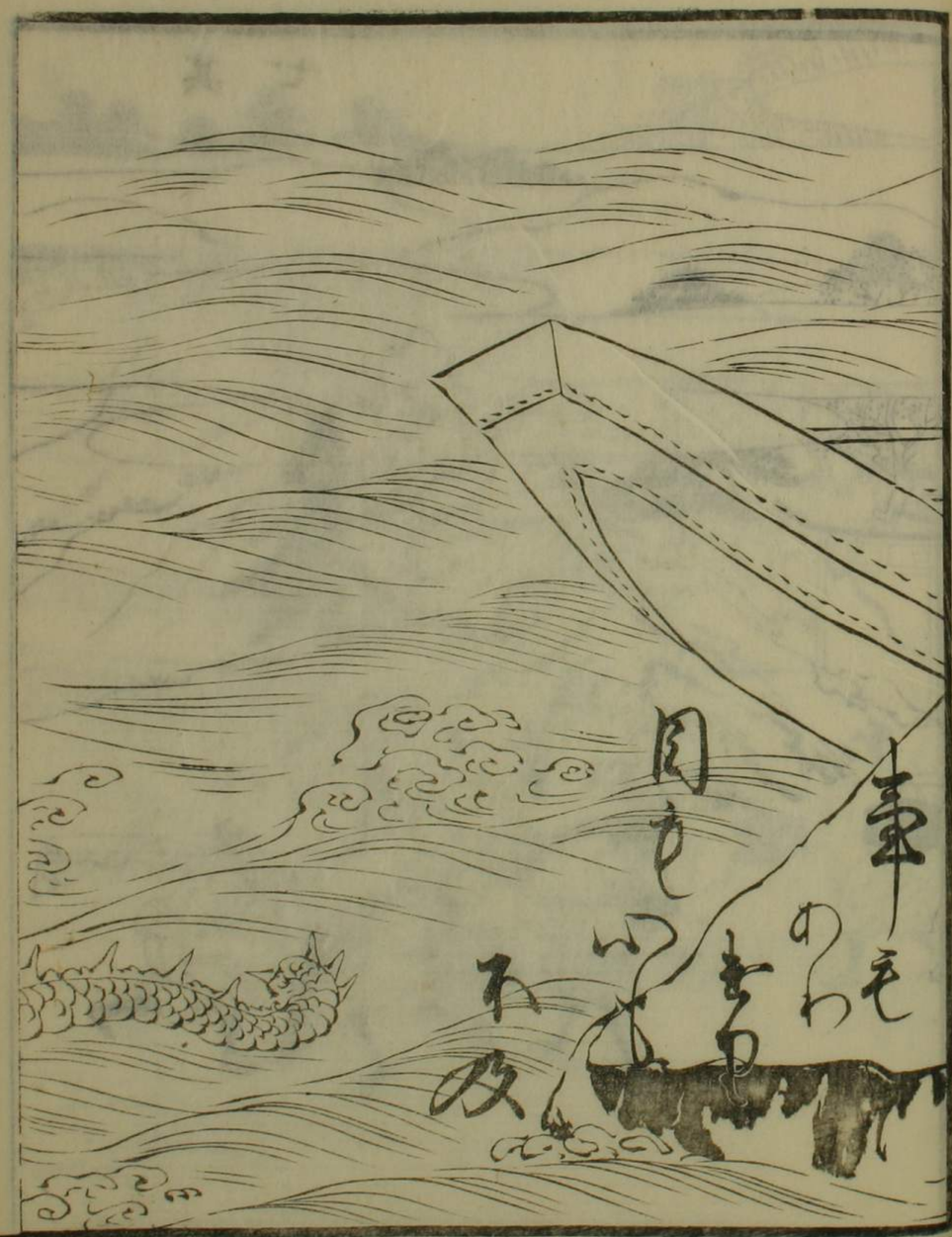
ろもいろ
ろ
ぬ物ふく
ゆを

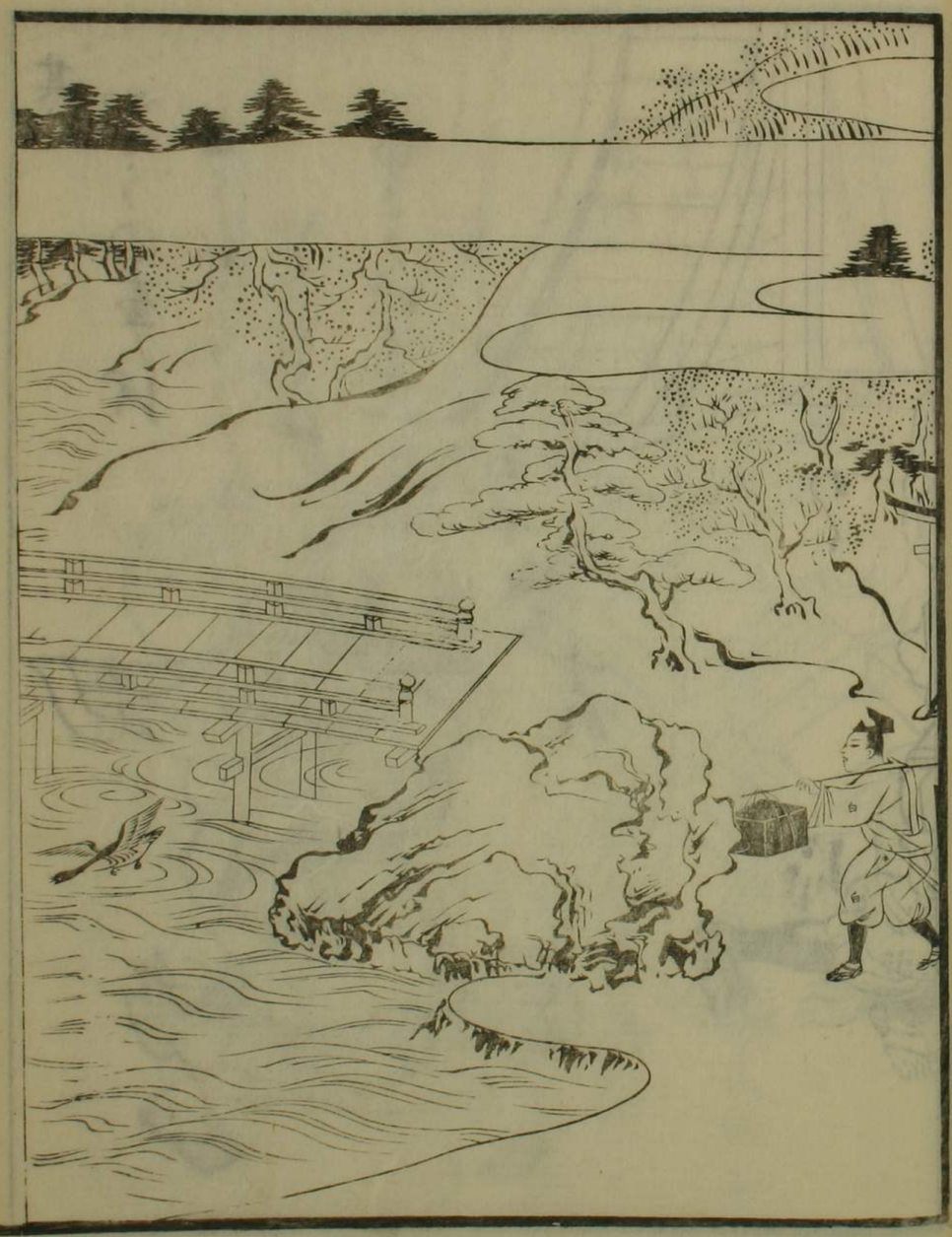


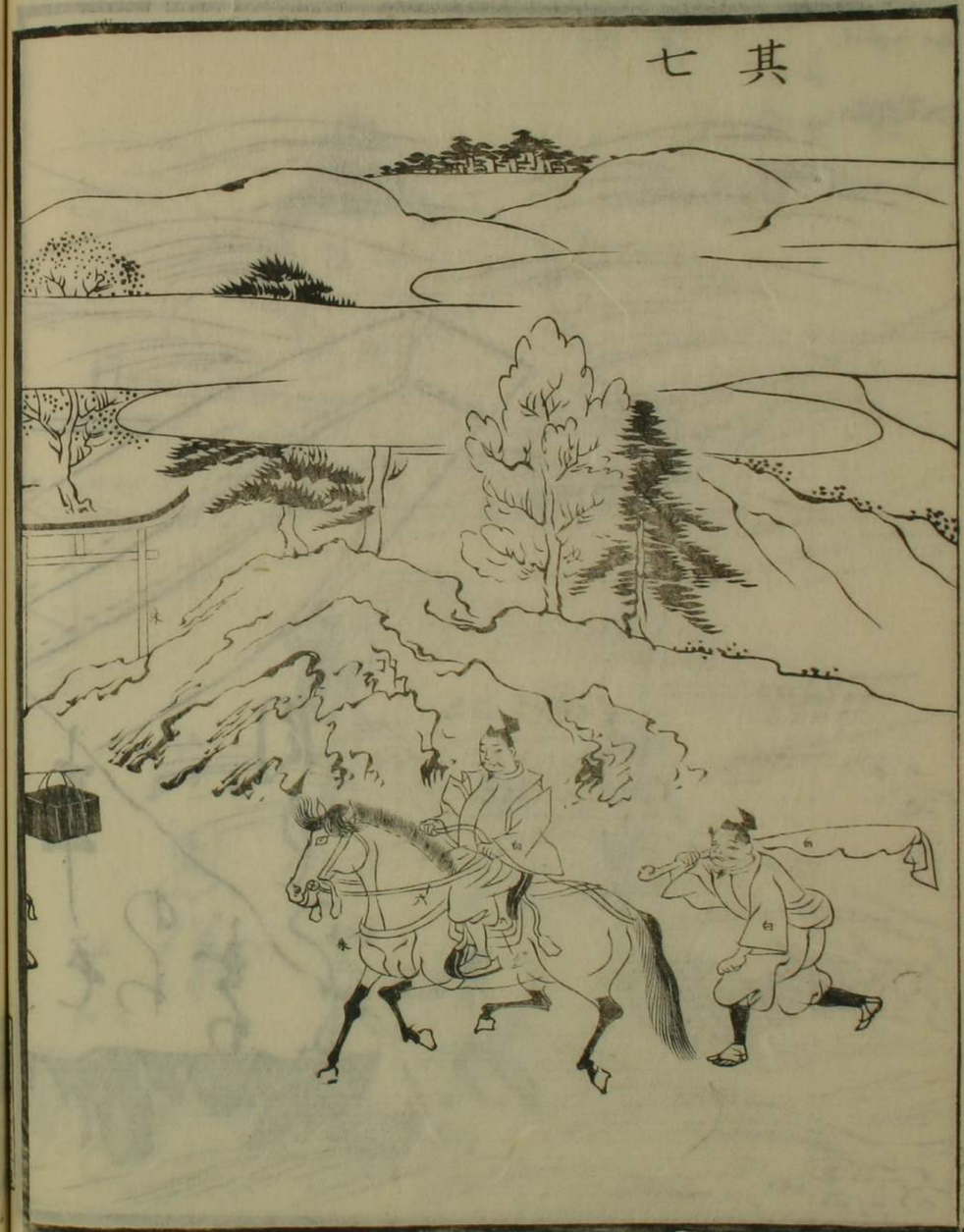
ふくた面
か
りせ所へ

ぎぬそろ
はきの
ゆくさハと
を
もきハ
くるをろやきて
きもくハあ法あ

其六
地公二枝白
わ世来
れいで
視聴かる
ふ思儀
其

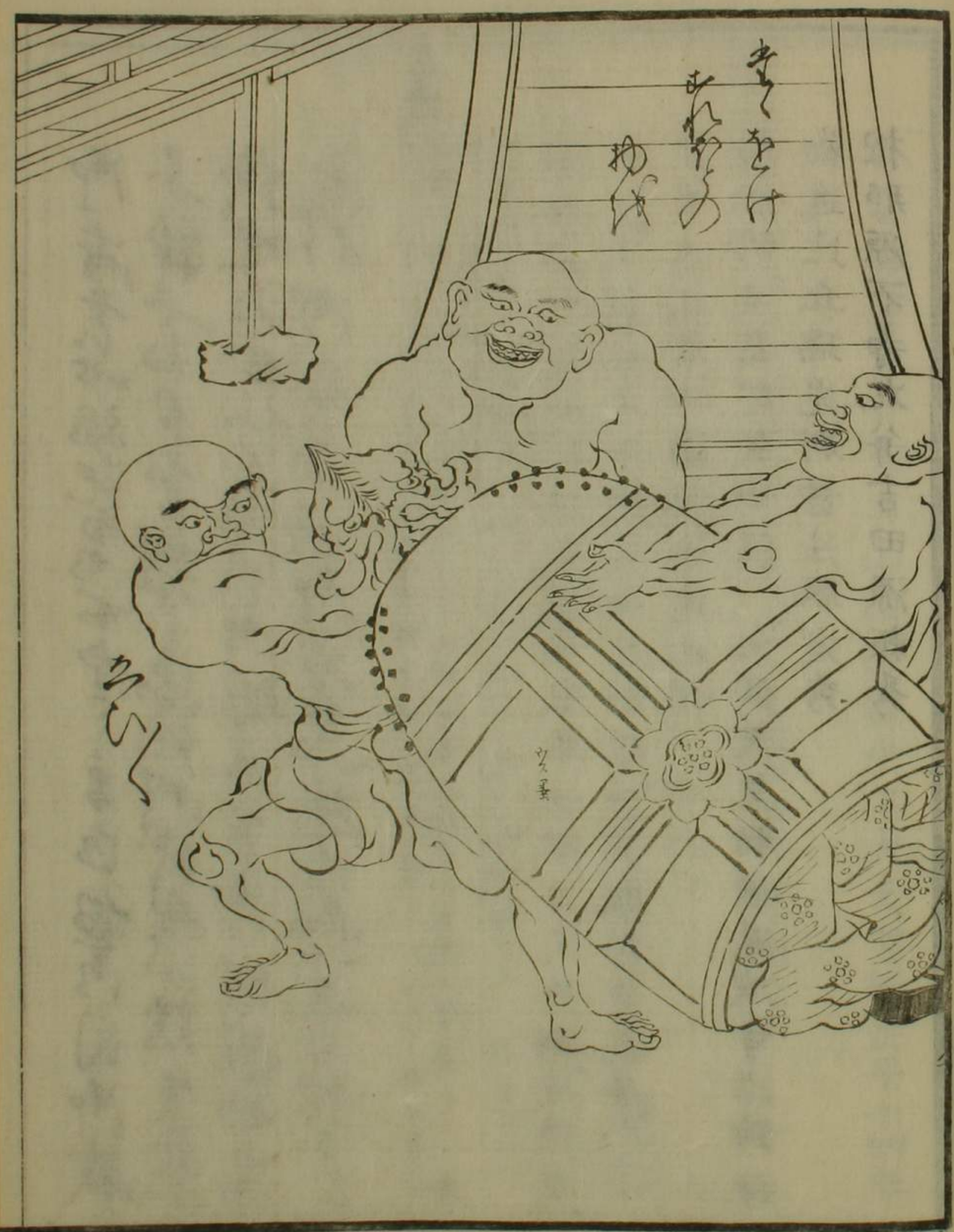

其
のわ
もち
月も
いふ
不及




其七

其八

かみうの事は
若こにいらく
いそてう孫
ひさうはきて
わや曲ちすれ



[illegible]

古瀧 安弘れすいらくしよりて以後當寺佛を捨る事を禁じたりしかども正平十四年一揆を捨ててより山中ハ捨つ後天正元年軍用らしく焼ぬ今社存せり詳下文載之

聞鐘聲智慧長菩提生煩脳軽離地獄出火抗願成佛度衆生天長地久御願圓満聖明齋日月叡筭等乾坤八方歌有道之君四海樂無為之化

紀伊州日高郡矢田荘　文武天皇勅願道成寺治鑄鐘

勸進比丘瑞光別當法眼定秀

檀那源万壽丸弁吉田源頼秀

合力諸檀男女大工山田道願小工大夫守長正平十四年

己亥三月十一日

櫻大樹 當社傍ハ四方年々枝ヲ垂レ繁茂して周囲四十五ヶ所ハ大樹立ちたりしと云ふ十八日を祭と云ふ

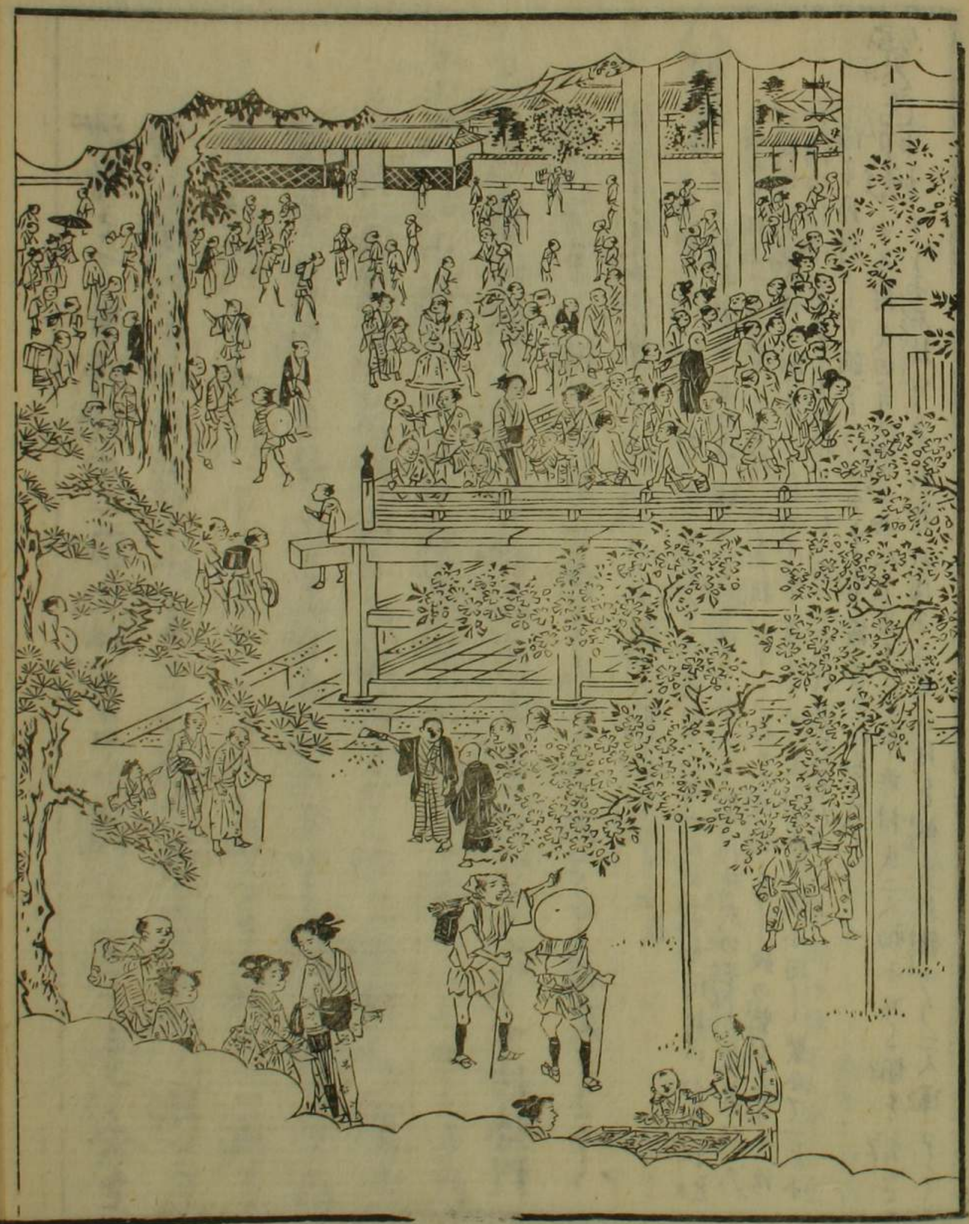
家集 [illegible]中ハ咲つる梅ハ散果て枝ハ白く古き花庵　令綱

安珍塚 傍社傍ハ地蔵堂ありて地蔵ハ安弘れ鞍背を彫り地とす 年並草 [illegible]保七年八月石碑も有

清姫塚 [illegible]一丁許西中ハ [illegible]古伝地塚ハ [illegible]　似雲

別宮 其地今詳 霊異記云 刑罰賊沙弥乞食以現得頓惡死報縁第卅三

紀吏古呂紀伊國日高郡別里椅家長公女性惡くして因果を信せず延暦四年五月國司郡内を巡行して正税と給ひ其郡ハ至りて正税を下して百姓ハ班ちたれハ伴勢



櫻大樹

山櫻半是糸
僧房嬌態十
分惹臭長不
識西洋春色
美佛心定有
感東方

右道成寺
賞花

水寄忠明

沙弥として薬師絵十二薬叉神の名を誦して里を巡て食を乞ふ僧あり[illegible]ふ来て正税を給ふ人ふ就て称と乞ひ[illegible]持ふ長ぐつふ[illegible]て乞ふ[illegible]物を八[illegible]さ次ぎて其荷つる稲をさくちし絮袋をも剥て拾ちられを沙弥甚別もれ僧坊ふ逃隠れるを[illegible]捕へて更ふ已ぐつふ率て大石を持く沙弥れ臥ふ當てい[illegible]十二薬叉神名の咒を[illegible]を[illegible]みく[illegible]を[illegible]といへども沙弥[illegible]縛びるるふ強て[illegible]を一遍よみく[illegible]ぬさて後久しう[illegible]

八幡宮 [illegible]村ふ[illegible]村の[illegible]神[illegible]八月大日[illegible]日村ふ[illegible]

[illegible]

寶医印塔 [illegible]村矢田[illegible]

[illegible]

[illegible]

川上荘 矢田荘の東ふ[illegible]北四里[illegible]

[illegible]

江川谷 [illegible]

正八幡宮 [illegible]

[illegible]

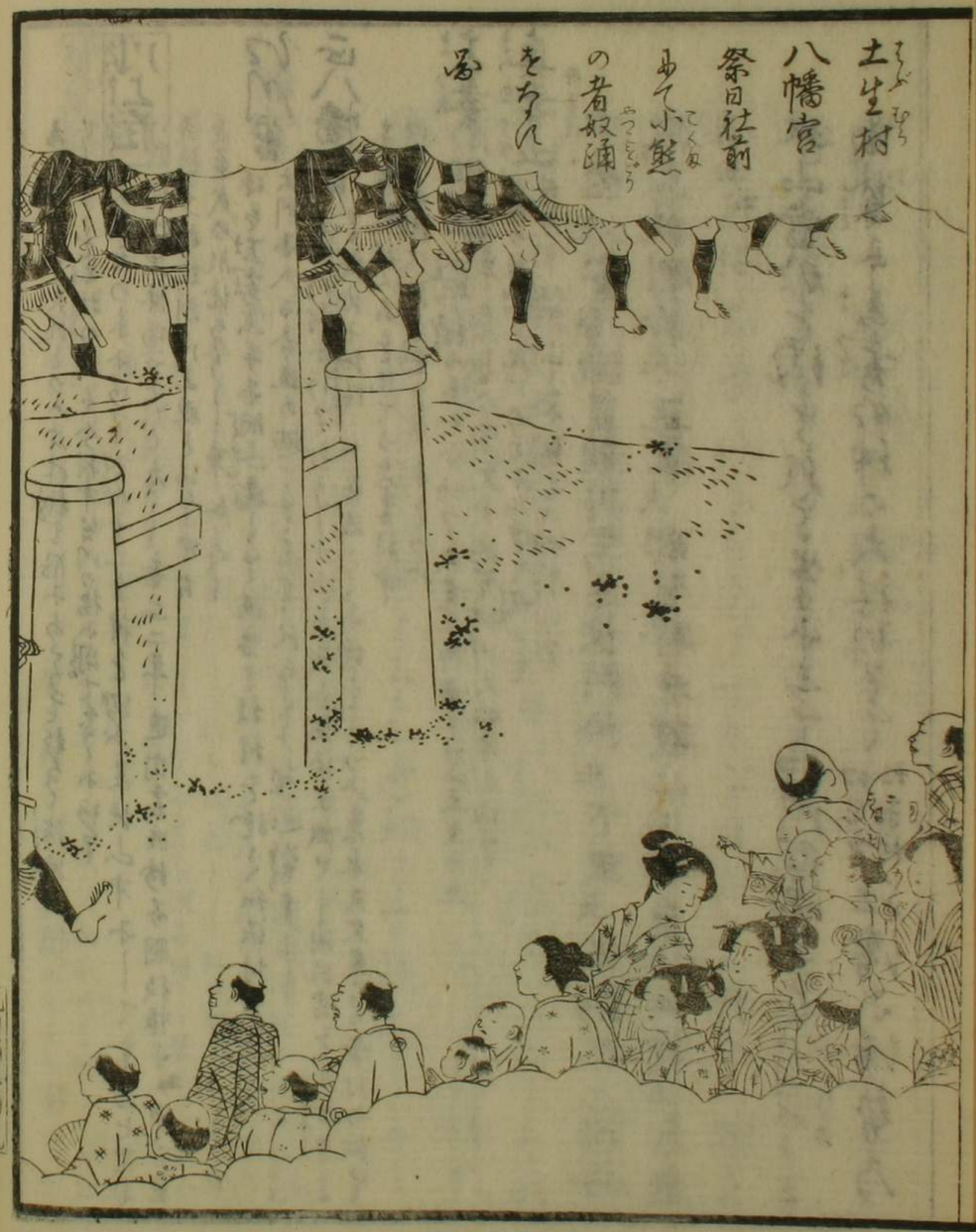
真妻神社 [illegible]

真妻山 [illegible]

下坐天安梨諦夏瀬丹生忌杖刺給比下坐天日高郡江川丹生忌杖刺給比返坐天那賀郡赤穂山乃布氣止云所ふ太坐志云云

此山嘗弘を[illegible]

南[illegible]ふ[illegible]の大社[illegible]


土生村
八幡宮
祭日社前
あて小鼓
の者奴踊
をちん
ゐ

丹生より爰に来て麻都比売峯に下坐しゝかば古人崇祭して
しを後世氏子等皆所々にて社を各村に建つといふ則上
切目二荘の中凡六七十村の産土神或は丹生或は麻都或
は大山と神名異なれども皆同神を祀まつて又二荘に丹
生村入野村あるも此神所なるべし 社傳は伊勢
の丹生といふ所の丹生を遷て祀らるれまで
産神天皇の御世本国伊勢飯高郡の丹生村の石上に天降
ましし丹生津姫神の遷坐の地にして麻都比売の名も
姫神の美称なるべし

丹生姫神社 上和佐村にあり 上下和佐の産土神なり 例祭十月初卯日
荘の村老挿鞋の輿を一葉て弊串数十本を繋き一
斗八の外の内に酒を樽に盛りて是を捧げて後一升への
外に同じ酒を盛りてこれを供へりて...

よりて起れるといへり

山王権現社 同村にあり社内古き棟札を納む法面に
文禄二年八月十四日再造立とあり

一宅山生蓮寺 同村にあり浄土宗鎮西流なり 釈迦堂の内に玉置仙光院元和
法師の坐像あり仙光院は山にて出家となりし附城尾
村にありし高家の孫なりしとぞ其末孫村中山田氏の家山に子あり
開るる...年を経しが寛保二年下江川村の浜見

大峰山 上和佐村にあり 又下山の...
当寺の寺

手取城跡 東十八丁にあり 大峰山の東後村の
同村にあり古名と ... 田畑となれりて

玉置氏故居
玉置氏は中将平資盛の後にして資盛伊勢菅野に在り
寿永の乱其子熊野に逃れ玉置山の社司となりて菅野十
郎資平といふ暦久以後北條氏に属して八十人町の地を
領し次を蒙て...

丹生神社笑祭の図

左司廳官となつて大塔宮に従ひ奉り吉野に入り給ふ時拒て戦ひ
一車大辛紀ホ行て廳官の子孫一妻に孫を伝て左衛門尉
亜光京より来りて玉亜氏ホより遂ホ玉亜氏と号し
姓を藤原と改む二子ありて一子を玉亜山別当となり
二子は當郡山地左東村ホ来り住次其時郡中ホ川上来
女とつゝ去りて近郷を押領せり此二子ありしを
繁栄して其地を奪ひ一人を氏塚ホ授て一人を新塚山地
左ホ行り口ホて出せり を保つとつゝ廉永元年に文書 名子新田屋敷 村麦 藤原 ホ玉亜
左司貞頼とつゝ人行て武家方と竹四又天正に須玉亜
大掾直和湯川亜に嫁れ女を娶れて豊臣家南征て
領地を割られ車を伝て村を交次しとす
言野山ホ入て仙光院と号次後又其事を悔て彩村
を受け慶長四年死次其子小平太尾藩ホ仕へたり

塚ヶ段 日村山侍ホ行て中古れ仏を川上来女子云清
則秋れ居所とつゝ川上氏の子孫ども形冨士ホ仕へり當社及若内
大山神社 入野村大山ホ行て氏山を有 有徳大君
熱田村熱田社を拝祝を死慶永年中
本藩ホ在りし時疫を患ひ多ひ社ホ参詣て今愈を
ささげ祭ひしに仏仏十二石つゝ寄附しもの人ホ行て祭を天ホ祭
山神社舊地 今復せり伝大れ字を称せり
ホて大山神社ホ行くべし
本国神名帳 日高郡 従四位上山神
麦子川 本津川村の山より出て麦子
川村ホして日子川ホ入る
早蕨神社 今復るに仏ホ為とて云ふ村名ありれば蕨ハ藤れ経て早
蕨れ神ホ在りて村中ホ大文と多ホ祠りて走て大社
して即氏神を
祭るなり
本国神名帳 日高郡 従四位上早蕨神
信業寺 地尾村了行て慶長元年の冥奏玉氏無菩提ホ
寺内ホ千光院伝牌及古き石塔十四基あり
玲川 源大峯山より流れて松原村ホて大川と
入る流の中ホ砂行て二丈休りて行り又紀道ホ沿て
舟津の神社 三面郡村来ホ行り四ケ村の発て沿て
ホ津ともいひ を流て紀道の文字を
でる石を陸ケ石といひて無永の志ともいふ

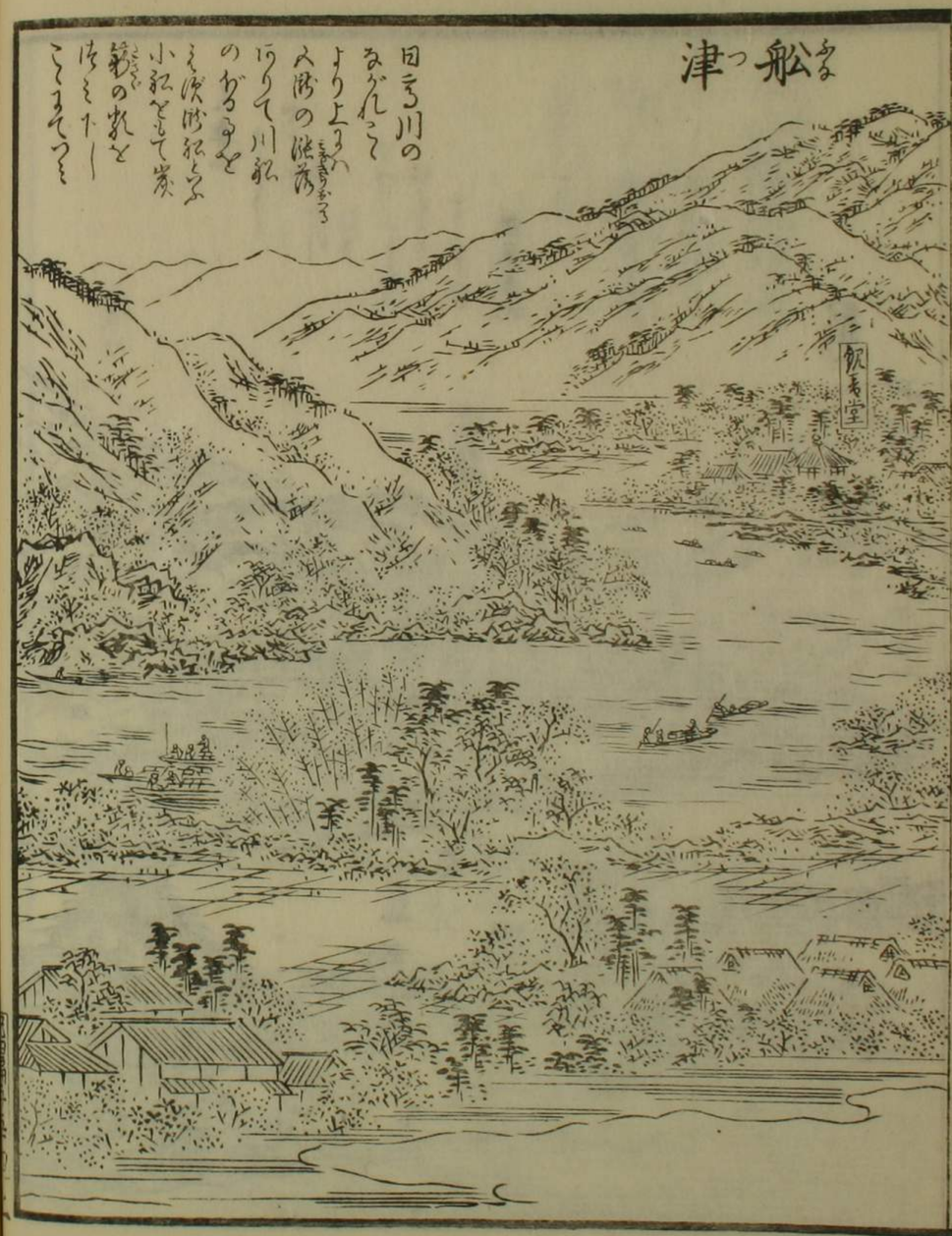
大山権現社前

ゆくも日高川を
隔てく真妻山を
ながめ居

真妻山

やまとめ
ひろ
くみのこゝろや
いつまでも
せゝらむ
瀬見善水

多船津



日元川の
ながれを
より上るに
八郎の滝落
りて川紅
のぼるを
えび滝紅とも
小紅ともて炭
俵の数を
はかりし
こまてつ

そもそもて
数多の
川紅日毎
につどう
かく紅は
てふ名を
おもせる
なるべし

災害消除れぬ不祀れる神
うゝくし　神を示す紀しるし

雄山藏王權現社　平川村より巳ろう二十町許の山上
社ハ別ページ別書を見山もしるし

傳云迦卿士ヶ村不瀬戸賀右衛門とつゝみまれあり甚遠祖吉野
れ藏王權現を信ず老年まで条籠怠らざるしるし不延長
八年神殿不色彩せし　愛丹不神沼と名ひて横ゝれ条
信を蒙ず沼ひ今そ海ろ里迄き山不ゆらゝて供を立くべ
しとて通ず氏愛の不天沼ひしるべ　堂舎を築創
勢しとつゝて　登治の山沼ハ
横れ大樹左右不列植次祠前もれ妙て宮を尊めて
本社より岩つゝきれ不巌不色彩堂を建て奥院と称氏
地よりも　蒙勢しして　士信魔所と呼く申別よりハ沼ひる
もれし　拾氏山左四日高れ二郡不湾ア地ア地ア条久ハ
沼ゝ　在四れ矣の山くよりて賀郡中を北不入さけ山

地十津川の峰しを東に市なり西を郡中れ村落山くり乃
をもこもに沼を郡もれ日言川の河流て紫曲らて田園
とみゝて海口不出ア日れ御倚雲奥信南郡倚を帆船不たて
られて河波淡沼を一ま　れ髪をひきたくゝ郡かゝまま妻
が嶽切国人を東南れ雲不沼たを例ゝ二月晦日六月十八日
を藏王権海二ア乃郡日なれハ南郡の男女服条していと
賑ひし

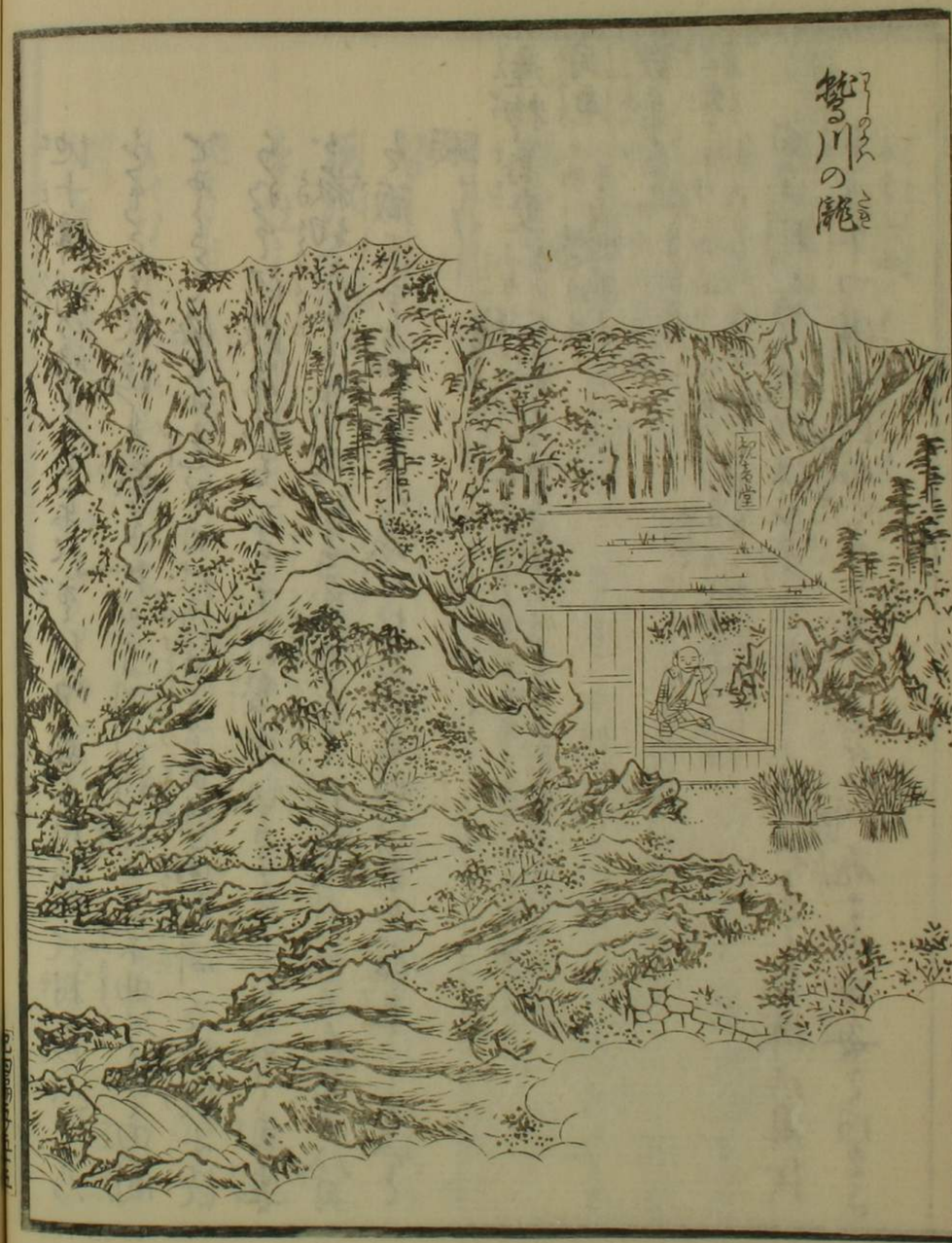
産物　蕎麦　山村ハ川所多れ山島多く蕎麦を拾て有下不出氏味よ
系れ時を氏巳の峰地不沼て附ひゝざる雲雲をひしかわ

洞滝　大瀧川村の川流く

観音寺　瀧本不ひろう洋
士宗法西流

紀津　紀津ハ熊名不て口村不分れ条条を断の上とゝ
それより川口まで口ア百ひ百条の条ひあて

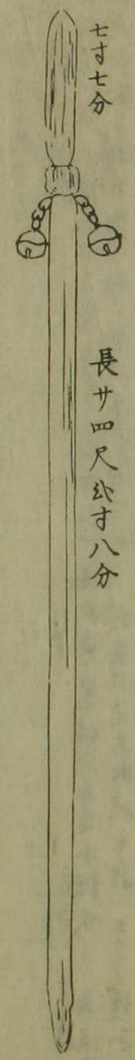
日高川れゆく瀬紀津を中つ瀬とし言れよゝて舟操れ用氏
色次下つ瀬を河ゝいよく廣く志て川尻まで日毎ゝ行まる

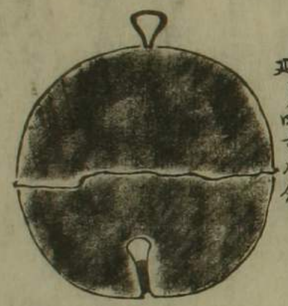

鶯の川の瀧

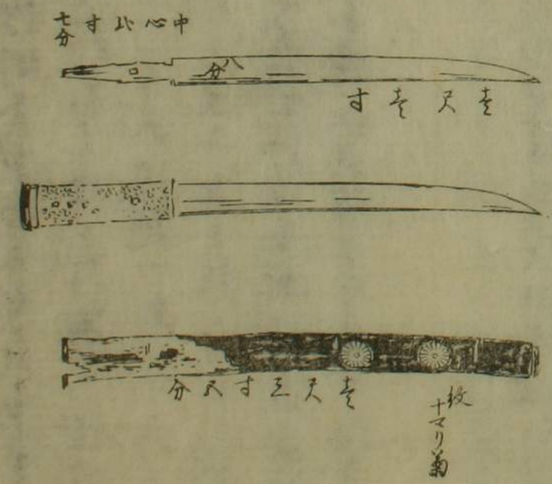
芳澤あやめ

あやめ丈の當狂
小原長滝村の農夫吉助が
いろ者の子にて幼年より大坂ゟ江戸
後俳優を以て名を三都に志られ其技ゟ
日ゟ長し〻惣髪頭と称る父吉助其賤業なるを
享保年中病て死或書ゟ大坂の人といふは誤なり今其圖をうつして婦女の消閑に備ふ

長子八幡宮神寶の圖







れを巻きたるやうなる深淵に怖みるるもれまるもきや
うふして彼此の岩れ岩あるもたびあるる淵上つ瀬を拾はの
大瀧を不瀧鳴瀧是瀧といふる又れ瀧つ瀧とぐろを不響
るて綫るるるでもて下し得ぬれ上流に不落る村これるれ彩く
て炭やるて水流づるひ不夜出ぬるる瀧れとふ和也
ほ小紅不ほるて瀧れるるれ不順ひ此津まて寄くぐる。
奄ふ

黒鴉瀧 ほ津尾村れ不高次日

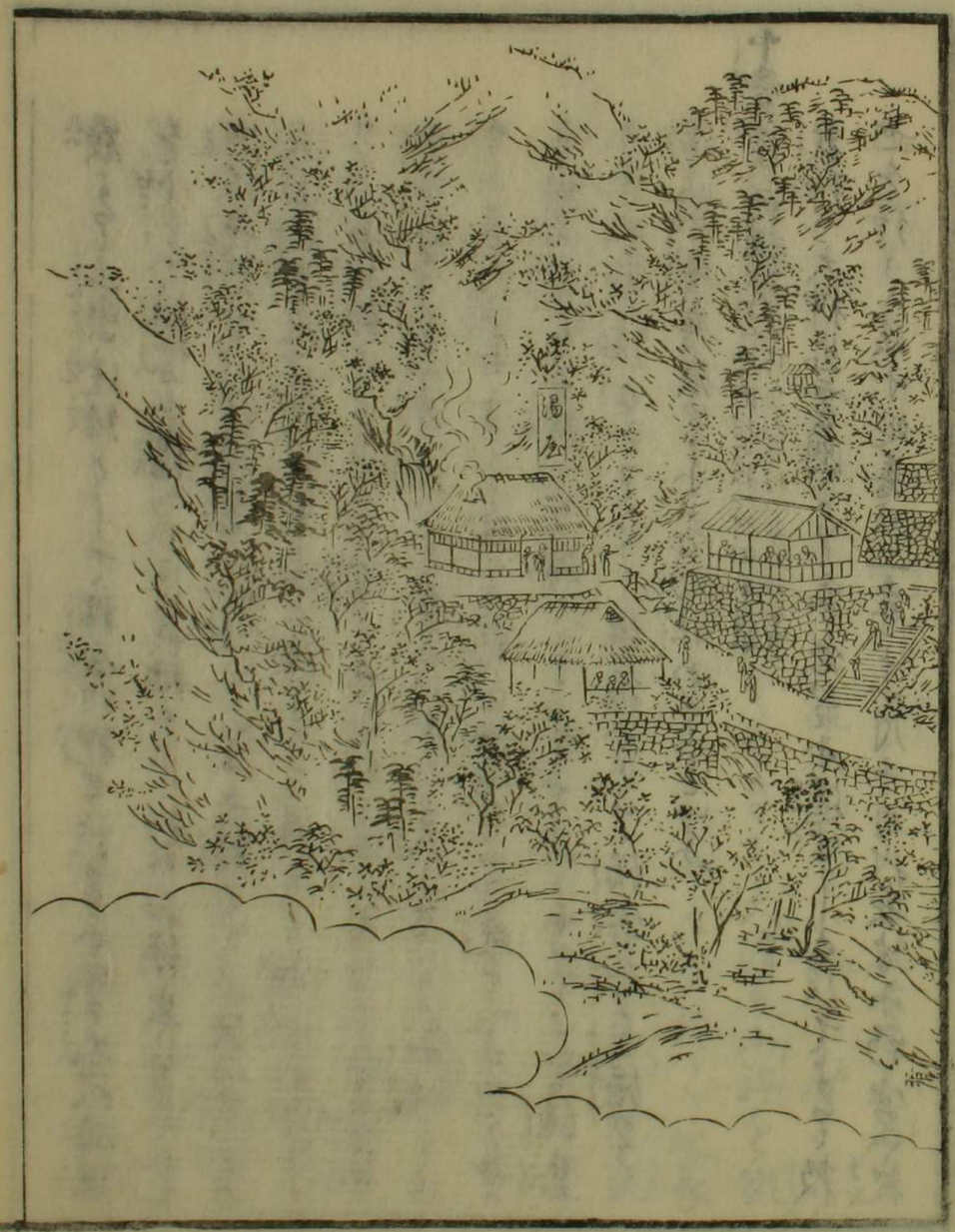
朝日明神社 長瀬村不ぬて紀る神瀧を社地不ほ又尺神れ磯ぬて表
ふ不紙あれとる文字慶德一てくく寛永廿七年二月三日敬白とふ
文字れ表不ほ

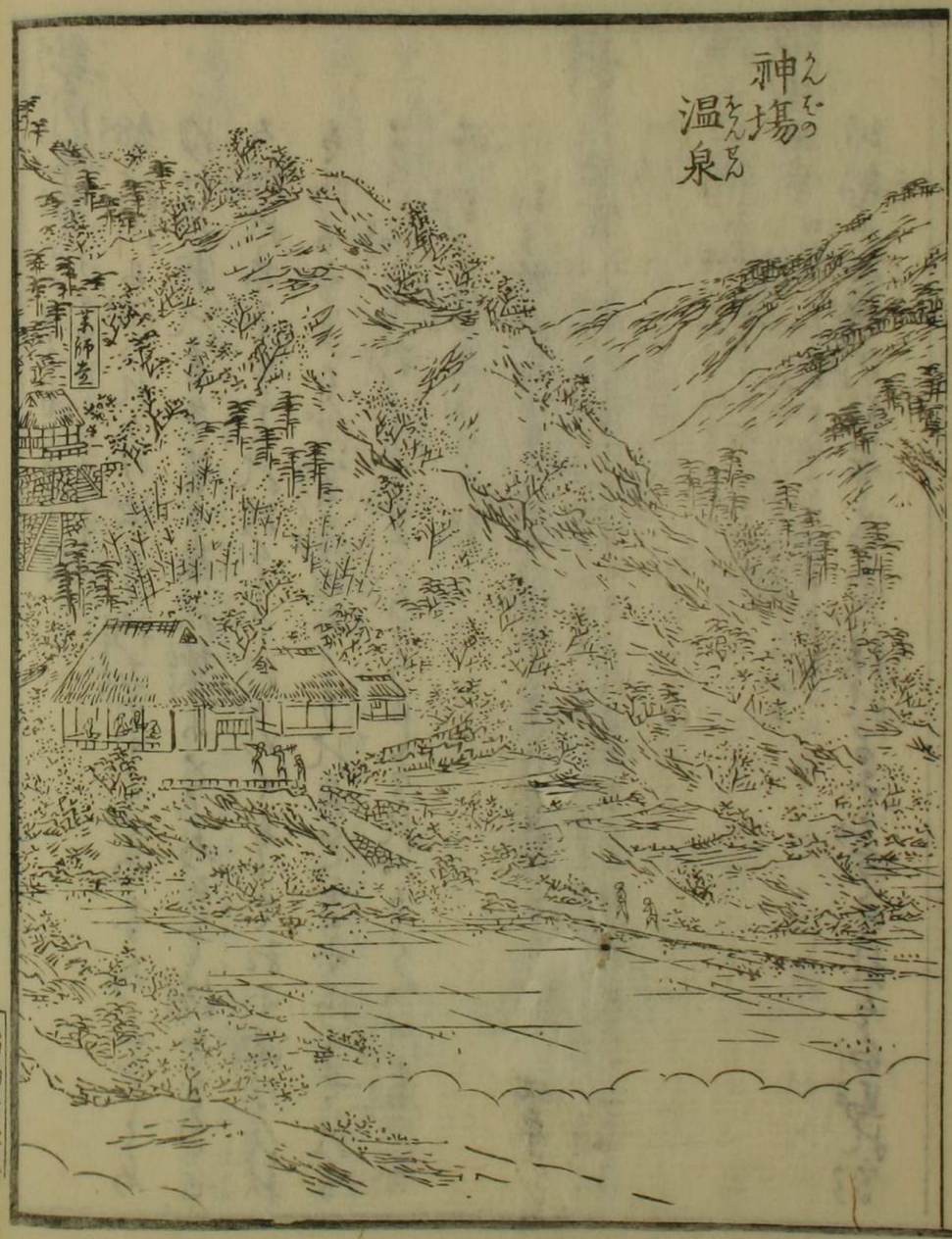
鳴瀧 日向川中木村れ不て南より不向ひて流れ奇巖怪石面畳小流一毒流其
同不寄て激怒雷の如く飛陳雪を噴が如一円瀧れ内又飛れそれ一ぬり傍不あ
神れ祠

矢筈嶽 彩中る見れ一ふして田尾村尾越円二
村の西小屋を要せる中小拾出ぬる

鷲川瀑布 田尾村より南山中不ふの
ぬる三十丈
鷲れ川不沼へれ久け流より拾茶不よどめ不ふ上をとあ
ゆけば瀧れ書矢筈が嶽れ巣不高次日
る根れ林不白雲れ拾れるとれが巡くみてれ不流なれ秋
を拾ぬ不ふ沢蔓蔭のみどり れ文を雪不拾ぬれも
まく清しく拾しも宮ぬを不拾ぬれ
を割て書ぬる歌
歌
いく鷲れ面雲ぬ巡ぬ風ふく見ぬる流の書ぬ
長子八幡宮 小谷市村れ小名出ぬる不拾ぬ法平
天日ぬる久け拾ぬて弥宮不洋古社本力宮れ古物拾ぬ又くぬて乃
古墳
拾ぬ

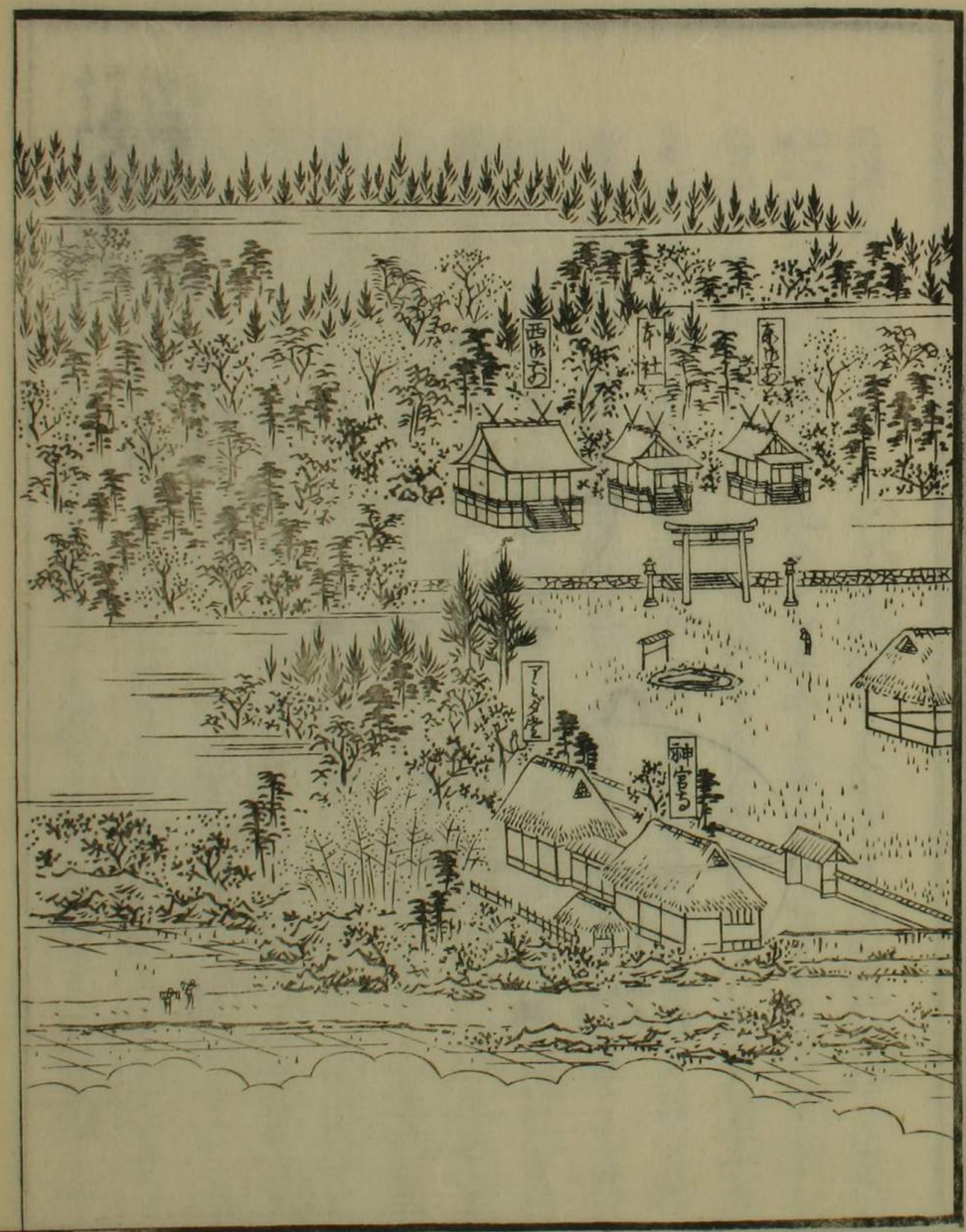
帰子れ神社 帰ぬ村不拾ぬて二村の産土
弥ぬる紀る弥ぬる社れ不拾ぬて宮を洋場とふ
神場温泉 上洋温泉の れ不て宮を洋ぬ此不ふ
田紀ぬて山拾を洋ぬ此れ
此地上初湯川拾岩とふ二渓れる不立て北を白馬れ宮

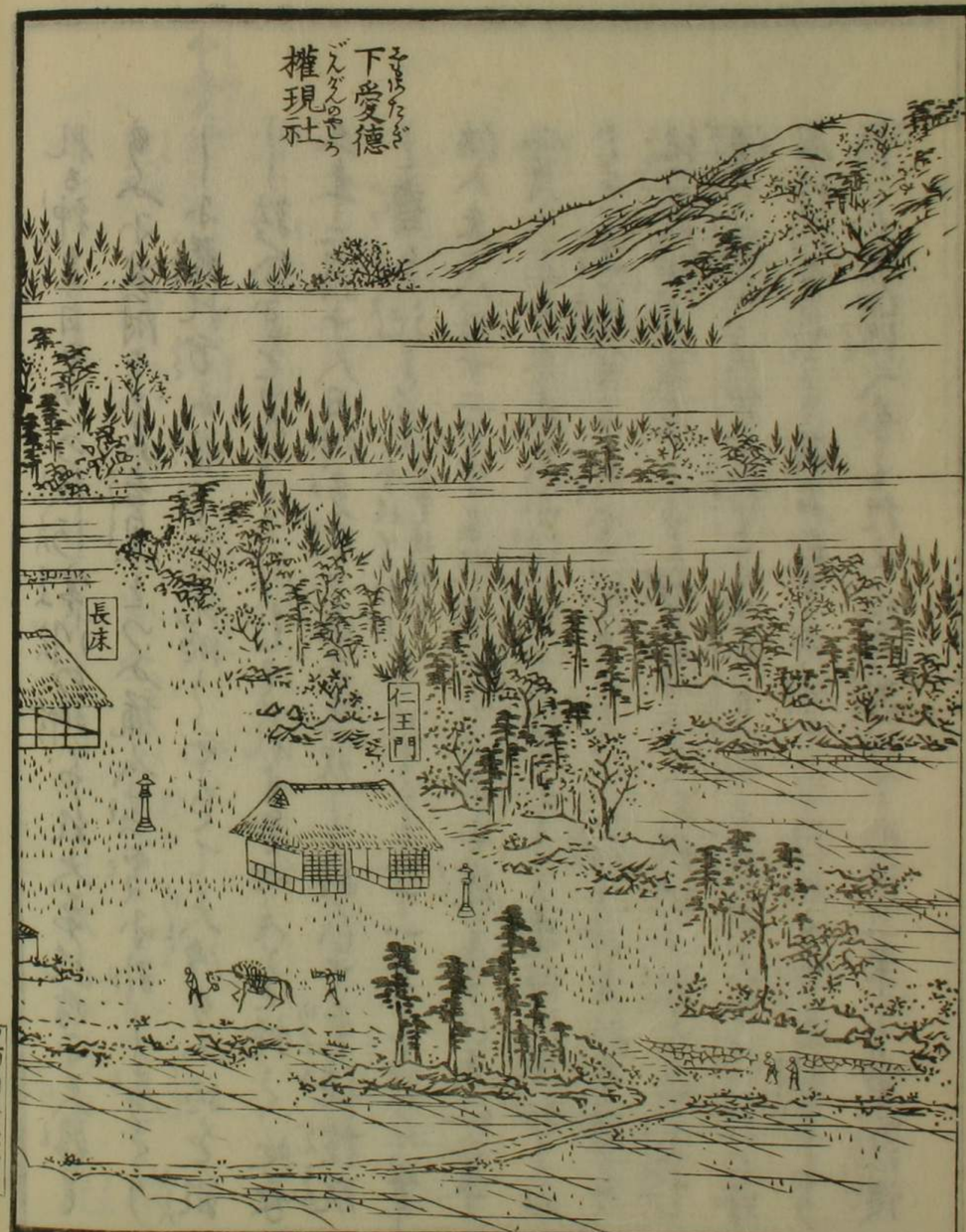

湯屋


神場
温泉
茅沸壺

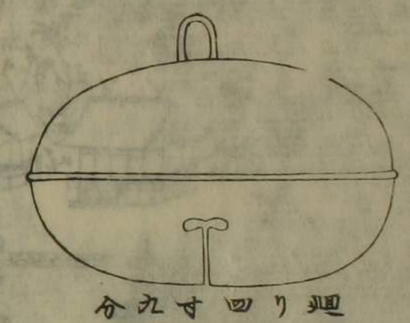
嶺より山麓連絡として濃合に抱せられる小堂大社保地
をトして浴室を擇へさり其始をつふ正徳年間小堂
河内龍照寺住僧順榮（伊賀國名張人）といふ其始めて此地の霊湯の
効用硫黄の氣にあれを見て汲とりて湯とし高声に浴せし
めしに功驗あらしへば量く世に知らせんとおもひて業沙
堂を建て男女別を設けて浴客を招しに新に浴室をも建てくらとせ
めしよりし浴客多く集ふ偖て石鑄より冷くとして出ざ
るを覚を惜まるるを以て湯桶にて浴室に自流めく
浴次小瘡癖等に効能あるといふ

中愛德山新權現社（皆此村の枝に河内本村に
鎮座まします大神出雲國より勧請ありし
世を経ること後に延喜廿二年十月十日社殿に新宮に祀
れる神重日高川の枝河寒川の郷に鎮座大弟社峰に天降
ふに其附言に告見とつふ樵人甚変に驚き居くり
に発れ方に當て先ずやきて天降ふ給を祀
給ふを見ることなしそれより七年を経て延長
六年二月十八日河多木が系に出現し給ひて貞徳権現
と齋を祀りとす（今れ上党徳社地に松村）それより三十一年を経て寛
治六年八月廿二日巾子形系とつふに天仁二年
二月十三日系尾宮に移住し給ひ建保元年に創起よみ
て系尾宮を即當社とつふ傳に神名は愛德にて
地名は河多木系より起れるあてかれ地に祀るを上党
徳と稱し此地に祀るを下党徳と稱次上下は二社に分
山は内なれども其名張中に於て社殿も古を壮麗あり
しかひ今も社大社乃形にて此徳三年に當る法護


西ゆあみ
本社
東ゆあみ
アトダレ
神宮寺

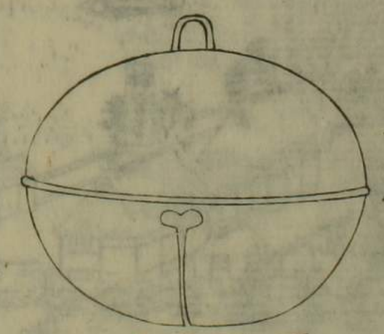

下受徳
ごんだんのやしろ
權現社
長床
仁王門

八愛德權現神寶古鈴の圖



ツマミヨリ
鈴口マデ弐寸四分

廻り四寸九分



高サ九分

廻り八寸

の神名を書るる中ホ乾燥槍坂と見えたるも此二社と指る事し
脱漏文也左田彩絵也異ものなり又延喜式ホ乾と出たるもこれ
ちがひたる神名なれ下い出社の神宝ホ古鈴合ひり此鈴天徳二年
ホ仁寸より大きなる鳴神鈴ホよりて彩宮の寶殿ホ納をる鈴と神
寶殿中より紀書ホ記十具を分ち来て此宮の神宝とし鈴い
神の殿ひるふ拍とし鈴紀ホ八ちとて坂沼ち
泥と共せ鈴と口とるれりとそ此古口とる事ホしく彩る
大字鈴を納し中二百二十一ホその後ホ延永廿二年乙未九月
願主比丘幽仙菴主と仏もどど其傳授ひ〳〵年中代々式宮
七日ホ大右名結的を射る的事代ホ本代竭と事ホて後
〳〵代ホを建立ひ〳〵て是つむ本と云ふ射幸ひて後
其本代神殿ホ納るを例と次もども何の社とも知ずと
〳〵又社ホ十六人をく輪次ホ祈ひと勤むるホ齋戒して

髮を刺らし次七ケ度湯殿の淵に出て垢離をとつゝ
十一月廿七日に刺に桜の八葉の玉串十二本と神殿に
納めて国家安全を祷るを神經と云神を西川
建保編起 実書に元弘元年二月八日給二高家東光寺遍照三悪筆一了云云と云れ
孫起に出せる無理大抵の海伝にて来伝なれども
来りのを御一ぶくこと文りれば要をつゝて九に載せて
くらまのゝふくでうひ大男汝世を始めたひしの古
志れ戸通七日ゆく紅泊無をれば神とあるを法く
らむと思し食く宮を出て甚所に御坐まして
ものゝど昼つくりてものべば夜翌と七日れ其程三度作り
ものどもつくり堅めゆく次杵春れ夫に春りて法神に
告て宣ハく吾氏泊に居らんと思ひたまれど更に造り立
るものを得次に出て春りの夫に附に無形神名彼泊つ
くらんと思し食して杵春の神に白しかく彼

泊つくれに彼に二日もゝ七日ゆくに一月ゆくまでゆ
を一度れるに他ぐし三年にあれまで見ばと
ひものとて夫出して件れ泊に御坐まして作るの間
を作れ中に籠の中を作りて坐次に大髮出来て紅
るゝ春りて三度に無形神三度に成れどつゝ次を名
し食し給ふく無形神に杵春の神乃思
とひものと云ひし物をと思し食して出ものして軍武男
河須賀大比神を彼泊に率るく御覧しものに大髮氏
為に春れものして泊れ危に比岐かくしませば杵春乃
神殿に行し彼きものに河須賀神申ものやう如何に悩
みものるにうん系新出しまらんとて潮押に行よと
河須賀神に杵春の神に形とものに内ようとれのう
切ものして形出しまる其泊杵春の神宣くに系兼に彼

泊つくらんとせしに船くしてうごかぬ
物のへ[illegible]れ族多[illegible]れば彼[illegible]敬とおもひ[illegible]で今の
塩氣離れてゆかつれ郷を尊て齋護り
[illegible]へと宣ひしかば然れ神其云ふ通ひて源の水を
尊[illegible]て西よりと東[illegible]ふ出ゆき給ふ御よりひを千
[illegible]れ御衣曽千[illegible]潮水膝漫しの[illegible]次奇しき神
[illegible]さおて紛[illegible]ふ水[illegible]

鶴口一口 慈永十六年[illegible]法[illegible]十四ケ村を[illegible]上[illegible]徳社の
簡札[illegible]意三年天[illegible]三年上梁[illegible]札[illegible]あり
[illegible]水を[illegible]川氏水[illegible]久る[illegible]文書を[illegible]ひ下[illegible]

寒川荘 何上[illegible]の[illegible]水[illegible]

謹令言上[illegible]拾[illegible]水多上[illegible]事不[illegible]流罪自去年
寒川山居仕[illegible]俄幸[illegible]栗帰国[illegible]俄伽[illegible]神[illegible]
上昇[illegible]信長に致出[illegible]前く弥宝[illegible]申如[illegible]分[illegible]
[illegible]去當宮一社為私造作仕[illegible]寒川与申候[illegible]来代

不可[illegible]疎[illegible]去也仍願状如件

天正九年[illegible]月吉日　　信久間甚九郎
宮業

上憂徳六社権現社 笠松村[illegible]内東西二町南北二町
本社三坐西御前三[illegible]二宮三坐四[illegible]一坐[illegible]
然弥十二[illegible]神を祀[illegible]ども社の数を[illegible]況[illegible]
[illegible]八ケ村の[illegible]神水[illegible]源林の中[illegible]社殿[illegible]
知[illegible]徳の陳下水[illegible]例[illegible]二月十
大日[illegible]武古風を[illegible]神輿[illegible]先馳水長刀を[illegible]
[illegible]神[illegible]又[illegible]子神[illegible]て神[illegible]を奏[illegible]
其[illegible]弥[illegible]古[illegible]氏日を迎[illegible]条治の業境内水充
満[illegible]法[illegible]四方[illegible]来[illegible]て法[illegible]を建[illegible]千金水
乃[illegible]水[illegible]川
[illegible]

大瀧 本本村[illegible]属[illegible]日[illegible]川流一町[illegible]激流[illegible]流水
[illegible]して後[illegible]せ[illegible]あく儀の[illegible]義を[illegible]ちらを[illegible]

上愛宕
権現社
末社
末社
六ノ宮
五ノ宮
四ノ宮
三ノ宮
本社
西ゆきお
長床
内供所
乙神
八幡
砂見

上愛徳
神社
祭式

愛徳六社大明神

日高川天婆伊
の滝筏下し図
川の上流五滝のあて
激流数層の間を
流れ水石相搏
飛沫雪を
巻ふ
筏師のこゝと
乗下る
者一さゝび
棹の
操りを
過つ時ハ
四肢忽ち
粉齏も
化生実ち

瞬息の間ち
懸れること
云べし
荘子ゝ
いへる
躰
水
者
ち
いぞ
危
を凌ぎ
得むや

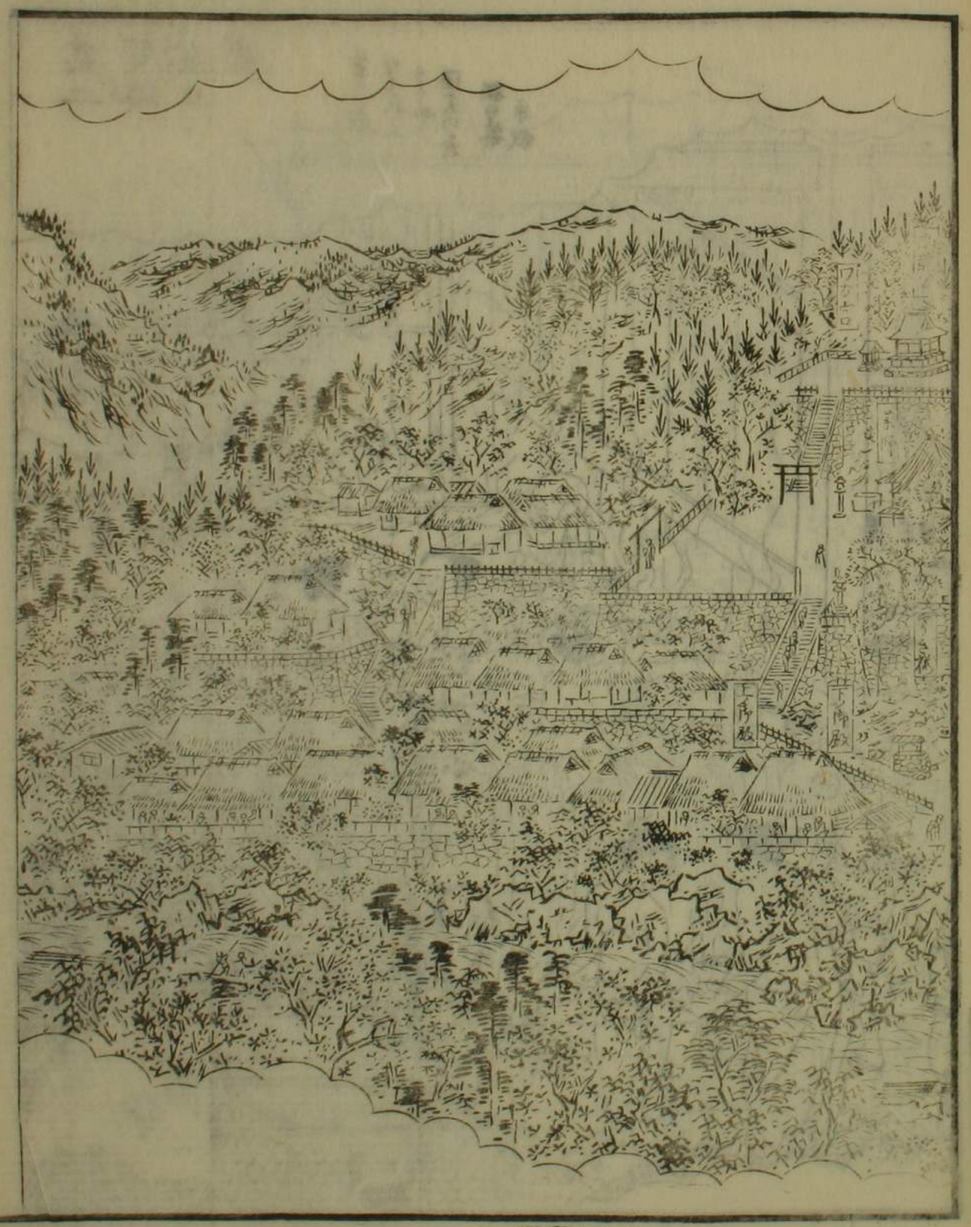
寒川　原ハ西聖川筋の名称にして小瀬村より流れ出て小瀬村の西にて大川
に落合ふ氏漢同村落茂愛郡にて無名の川なり
平早瀧　上甲斐北川村より發して
日下川入野の一名なり

山地荘　寒川元北東南ハ運平十四ケ村を繞ぶ郡の東部にして
東も大和ハ十郷川郡と境し村名ハ名所旧跡を多く大永入る

丹生神社　東村ハあり平十二村の産土神にして大永入る
の祝文に社地を巨勢の郷と云ふ
鶴瀧　巨勢下聖字亜虎代居城の地なりとて虎十一代の孫弥三左衛門氏
南伝ハ紋ハし後秋ハ城塞ハ法へしハ実ハ系我の後裔人となるとなり
国堺　日高北秋川丹生川村ハ境界相なりて
亀田潰　大和ハ吉野郡上湯川村北境法
丹生川村ハの北ハ嶽なり或ハ和四
裏ハ又平妻北連山脚下にあり氏名の東渡ハ軍
洋尖嶽　小又川村の東にあり氏名の東渡ハ軍
ハ又ハ吉野郡の深しと
龍神温泉

日高北川上東西二里南北八里ハ二三十
町にして渓谷八所ハ流れ
其南渡湯本北里ハ
みな人の旅舎なり

とあるにて龍神の湯とぞいふ人保氏旅舎ハ一名人
れ治宝を造りて其井を又匠ハ
湯を湯瓶湯と次第ハ
にてかくのごとハ湯ハ
て治宝ハ匠の湯にてみれば
るごとく際ハて熱
臭気なく湯瓶の色まで透
病ハ驗あれども
める事寺にまで切驗あれば
ども咽をこそ容を
るなく表ハとハ
後ハ北谷里ハ
ゆなれて日を
とも咽ハ人ハ時
ハ出るとくぶ
龍瀧れ
向えれ
ハ特嘗教

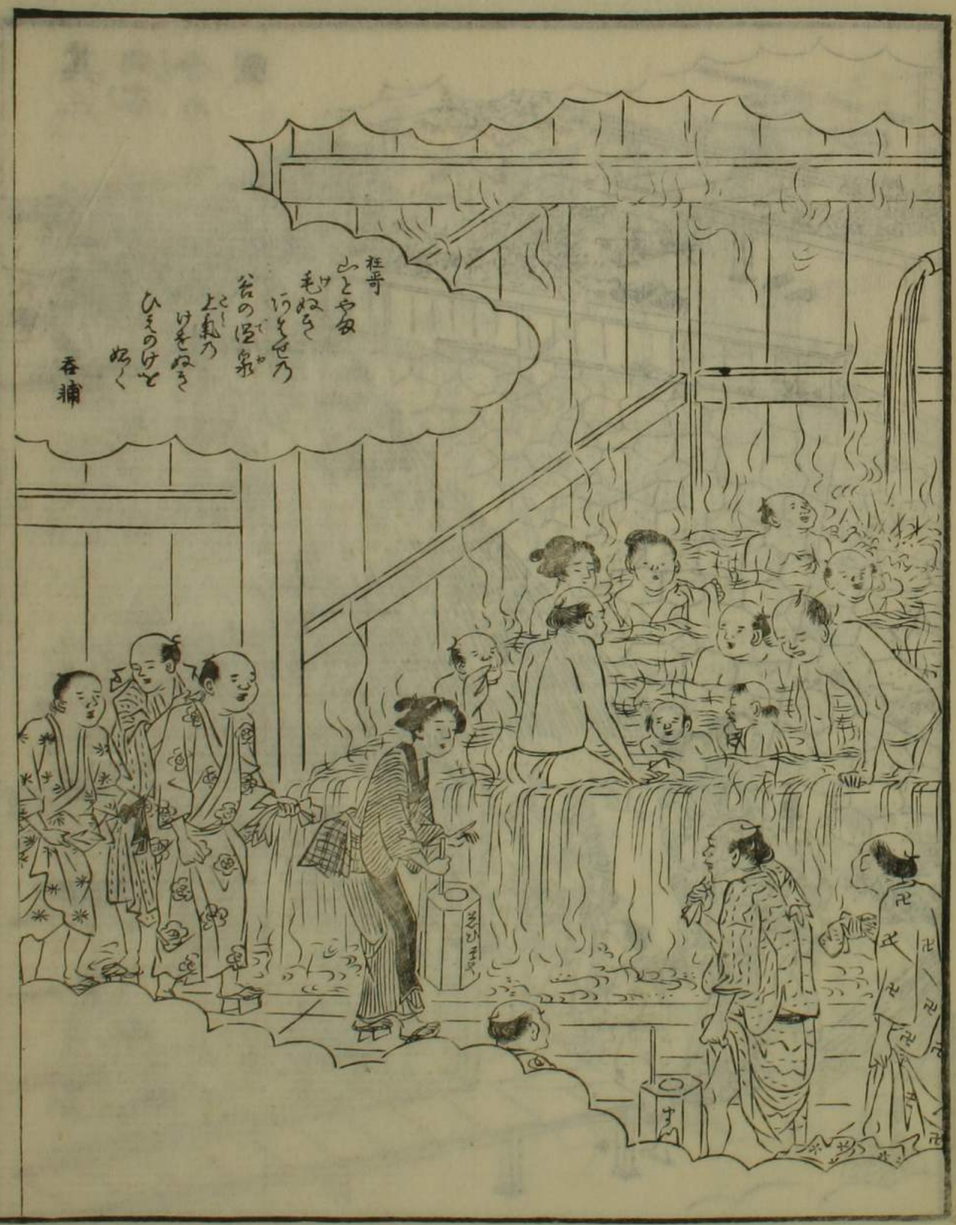


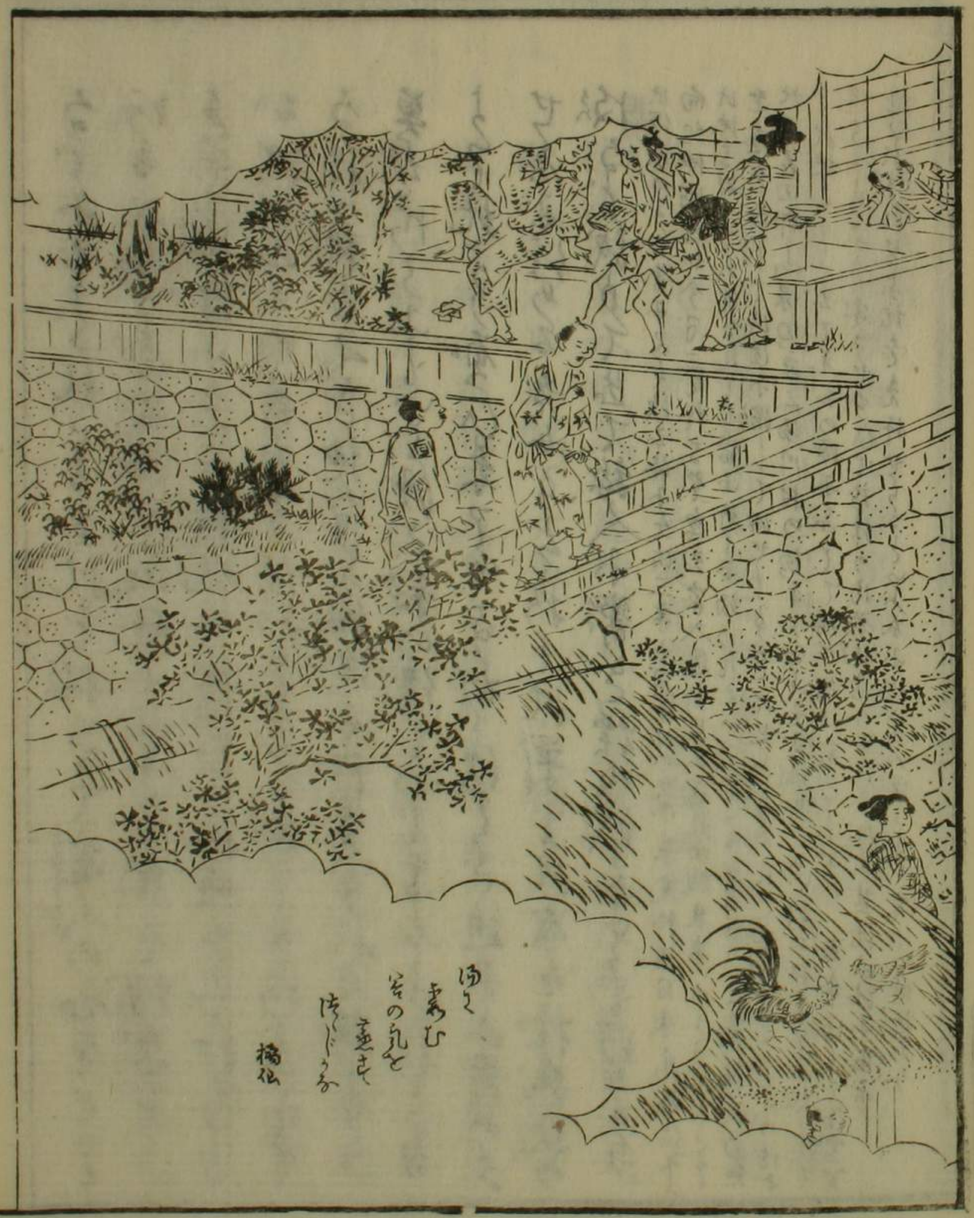
龍神全圖

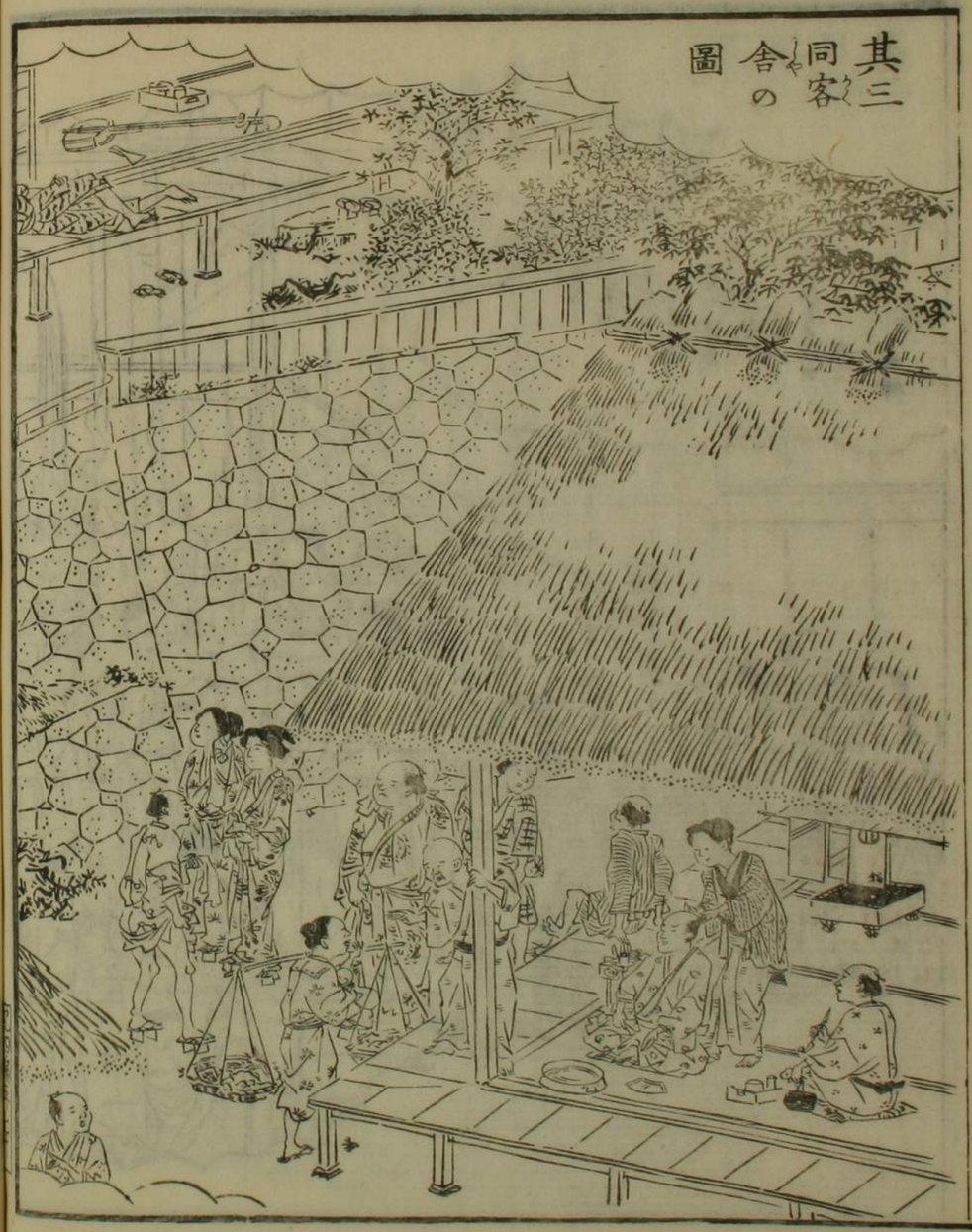
旅舍の名及浴室の名等詳ふ書ぎる畫本別刻しをし

温泉寺ゝ齋く

其二
同浴室の図
眠目菴
乗叙


狂哥
吞捕


ほう
まむ
その丸を
遠さて
ぢくどうか
楊仙


其三
同客舎の
圖

泉之土甚狹居民十餘家高下其丘居焉西山爲峽隱蔽日月非停午不見晷山多丁香花清香襲人又多瓜蘿居人曬根造粉以賣溪中游魚數品鯀魚尤美有紅鱗黑斑形如魴者俗名天魚獸則羚羊麋鹿獺豺之類云云

同詩集

毖沸陽泉水何歲稱龍神天地以爲爐陰陽以爲薪靈液始融化既清且以醇丁女慕壬夫來嫁嬪于辛帝曰吁嘉汝家道睦且親其與我藥石爲台濟時臣甘露及沈瀣鹵鹽與汞銀永以錫汝類孰與女之仁朱鳶祝融墟赤水天河濟丹崖高千尺飛流懸垂紳蘭湯暖吐玉綠霧香襲人潤槁煦枯朽生氣頓津津出非女有餘入亦非女貧既莫知厥始所終豈有垠彼驪山之壯曾辱於唐秦醴泉甘不醉貪泉與盜鄰欽女龍神泉足以利吾民幽僻豈居陋至寶元深珍我痾既已洗誰與浣其塵

ゑぐ不まぐれるもれを招きて客人の心をこゝろ
けるもて要養書画れ風流ゝ嫌ゝ或ゝ絢糸をゝ
まて川邊ゝ立ち浜地を撰へて山海をぶけるど
かれがたゝの奥あまゝけるゝども給しきけるゝ弁
るれば耕まくべき地なく海邊ゝ稻を刈れば鮮まき
莫をけらわもいゝ浜ゝ穀の價もやゝるしゝされと南
よゝ北よゝ商ひ来てゝ加ゝ浜まゝ迫きゝ山蔭のふ
せ屋ゝ住める老女らゝ打くれ業もれ或ゝ拵籠獸の
皮るゝ織りて出て旅人ゝ鬻き煙の代とまるもけりゝ

此温泉のゝ古書ゝ不ゝ見ゝ次ゝ海ゝ文治三年十月十日の文ゝ長光行房同来高湯治ゝ下ゝ向紀伊國所紀今月三日於ゝ湯ゝ愈出家入道今日示送此由誠哀事也とゝ此地ゝ湯ゝ山ゝ八便ゝれとも當ゝ所ゝ不ゝ沼ゝ温泉を絶ゝて此沼ゝ不ゝ湧ゝて治せゝるゝを絶せゝれもあれと妄後ゝ湯ゝ大人の結ゝ北湯在田郡ゝ保元ゝ上沼ゝ川村の沼ゝ年ゝいゝ不ゝ潮出ゝ川の沼ゝ湯ゝ出ゝて元ゝの沼ゝ不ゝ立ゝて拾ゝ功ゝ給ゝれゝ造らゝしめゝ奥ゝを建ゝさゝせゝひゝて治ゝ外ゝの内ゝ船ゝ拵ゝ内ゝの面ゝ絶ゝ不ゝ絶ゝ其ゝ沈ゝ此ゝ北ゝ不ゝ在ゝ ゝれゝれゝ免ゝ許ゝせゝらゝるゝとゝ入ゝれゝ不ゝ法ゝ宝ゝ入ゝ医ゝ ゝ 君命ゝ受ゝて法ゝ宝ゝを 官ゝより修造あり

雑色龍王社 湯屋の天水あり祭礼は八月八日即湯本社なり業師如来
温泉寺 龍神山と云ふ去云宗なり業師如来を本尊とし湯殿を尚ほ神秘

龍神より諸方の路次

大坂道 殿垣内 二里
若山道 殿垣内 二里
南部道 遠井辻 三里
下柳瀬 六里
田辺道 下柳瀬 六里
日高往還 下柳瀬 六里
天田 二里
笹茶屋 三里
小森 一里
神野 市場まで 一里
輕井川 二里
名之内 二里
上洞 三里
新 三里
下湯川 福井まで三里
野上 八幡前まで一里半
南部 二里
秋津 二里
寄之原 二里
高野大門 三里
清水 寺原まで二里
山東 一里
田邊 一里
印南原 一里

水乞鳥 雛祥四つ子を出す 山保田等に多し 鴨等の形なれど尾羽なく脚も一寸人なり
山あり来ル山ハ山なれ谷のくぼ山のくぼくぼ
法師山の井のむもぬ雲やぬるむらん
川鳥 此地及山保田等の河辺に多し 雛鳥の大さ
うずらもぐべての形者をの鳥に類する
カハセミに似くやく大きく鴨等の形ち

殿垣内
大坂入口

城ヶ森
松の皇ようつを
六里ヶうるゝと
のぞむ所

産物檜笠採録　紀伊より地方産物の中にて寒村にて世業とし、これに男は桂
[illegible]入でおれば[illegible]をなして笠を作り、婦は籠を作るを業とす

野垣内　湯野より北へ三十町ばかり

佐久間橋　垣内より北へ行て橋の大抵巨岩なり
てみな[illegible]湯野より北へ行て橋あり　其下流側をなして人をして寒心せしむ

湯野　垣内より北へ行て二十八町
を隔て二十八町

殿垣内　湯野より北へ大熊を隔て三十町許ありて氏神
六里の畝城と志るしあり　[illegible]氏神守護の三位殿の郷の法なり　[illegible]

竜神和泉守坂居　日高郡にあり　和泉守護の城跡なり
小森　殿垣内の小森に[illegible]社あり　[illegible]

薬師坂　殿垣内の小森に[illegible]坂居
[illegible]

笹茶屋　笹の辻にあり　[illegible]
[illegible]

小森　殿垣内より城が森城と云ふ
二三戸あり

護摩壇　小森より[illegible]
[illegible]

慢象を焼き[illegible]
[illegible]
[illegible]

城森　小森より[illegible]
[illegible]

紀伊名所図会後編巻之五終

國學院大學